



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第864回

日米安保なき世界の可能性

R6/7/4

パネリスト：

折本龍則（千葉県議会議員）

ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）

藤井聡（京都大学大学院教授）

山中泉（著述家・一般社団法人 IFA (International Freedom Alliance) 代表理事）

矢野義昭（元陸上自衛隊小平学校副校長 陸将補）

ロバート・D・エルドリッチ（エルドリッチ研究所代表）※スカイプ出演

司会：水島総

\*\*\*\*\*

水島「皆さん、こんにちは」

一同「(礼)」

水島「鬪論！倒論！討論！2024第864回目の討論となります。今日は『日米安保なき世界の可能性』これは実際には日本の可能性ですけどね。このような話をしたいと思います。この8月15日でチャンネル桜は20年目を迎えます。この討論番組をずっとやってきたんですけど864回となりました。安保条約についてとか日米安保の問題の将来とか、様々な形の討論をやって来ましたけど、日米安保がなくなる時、或いは、アメリカ軍が日本から撤退というか去っていく時、こういった問題については、実は863回もやって来たのに具体的に議論して来なかった。

この外国軍隊の撤退というのは、自民党の立党宣言の中に入っているんですね。今、自民党は全く変わってしまいましたけど。自主憲法制定と外国の軍隊が去った時、我々はそれに備えなきゃいけない。この立党宣言は中々立派で、私も『くにもり』というのをやっているのは、そこから出発しているんですね。

もう一つ言うと、日本の2600年以上の世界最古の歴史の中で、外国人の軍隊が80年近くも居座っていることを許容した時代は、日本の歴史の中で無いので初めてのことであって、これをどう受け止めるかということですね。悔しいとか屈辱と受け入れた人も居るだろうし、これは無理も無いんだ、集団安保だからいいんだとか、色んな人が居ると思います。ただ、本来の姿は、どうなんだろうということを含めて今日は真正面から、この米軍が居なくなる日、或いは、日米安保が無くなる日、まあ、今、トランプ・バイデン会談で、2～3日以内に、バイデン大統領が大統領選から撤退というようなことが、かなり言われている。

これも、皆さんご存じのように、今、集団で急に始まった訳です。ニューヨークタイムズ、ウォールストリート・ジャーナル、CNN、バイデンの味方のメディアが急に主張し始めた。それと同時に、もう一つは、そんなことは前から分かっているだろうと。分かっている何故、今、始めたのかということも含めて、アメリカの情勢が色んなもので変化し始めている。

こういう中で日米安保、皆さんは、昔の通りだとか、こういうもので本当にいいのかっていう素朴な疑問をお持ちになっていると思います。ウクライナでアメリカ軍がどういう形をとるかっていうのは、よく解った。或いは、イスラエルの問題。今、こういう形で東アジアが緊迫した状況になって来ている。

こういう中で私達の国の安全保障について、もう一度、原点から議論してみたいということで、今日は、そういう思いをお持ちの皆さんにお集まり戴きました。では、ご出席の皆さんをご紹介します。まず、元陸上自衛隊小平学校副校長で陸将補の矢野義昭さんです。宜しくお願いします」

矢野「宜しくお願いします」

水島「著述家で一般社団法人IFA（International Freedom Alliance）代表理事の山中泉さんです。宜しくお願いします」

山中「宜しくお願いします」

水島「京都大学大学院教授の藤井聡さんです。宜しくお願いします」

藤井「はい、宜しくお願いします」

水島「歴史学者で麗澤大学国際学部准教授のジェyson・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「お願いします」

水島「千葉県議会議員の折本龍則さんです。宜しくお願いします」

折本「宜しくお願いします」

水島「そして、今日はスカイプのご出演でございます。エルドリッチ研究所代表のロバート・エルドリッチさんです。宜しくお願いします」

エルドリッチ「宜しくお願いします」

水島「今日はこのメンバーでお送り致します。本当に自由な発言をしてくれる皆さんでございます。まず日米安保なき、或いは、駐留米軍なき日本、こういう可能性とかでもいいんですけど、皆さん、それぞれ、この問題についてのお立場というのを簡単に述べて戴いてから、議論に入りたいと思います。じゃあ、まず、矢野さんからお願いします」

矢野「はい。『日米安保なき世界の可能性』というテーマですけど、結論から申し上げると可能であると」

水島「はい」

矢野「日米安保の基本構造というのは、旧安保条約の場合、内乱条項とかあって、明らかに隷従性っていうか従属性が強かったんですが、それが新安保、まあ、現在の安保条約では、改善はされたとは言え、基本構造としては従属性というのは牢乎として残っていると」

水島「はい」

矢野「それが、例えば付属の行政協定である地位協定。それを受けた日米合同委員会という、まあ、組織として、現在でも継続していて、この基本構造というのは占領下に於ける占領軍、米軍の要求を日本の各行政機関の長のクラスが並んで受けると。

そういった一方的な構造になっている訳で、そういう点で言うと、日本は依然として隷属国家であると。その隷属国家である最大の理由は、やはり片務性にあると。つまりアメリカは日本を防衛するにも拘らず、日本は、それに対してアメリカを防衛する義務は負ってない。しかし、施設、区域を提供するという義務を負っていて、基本的に日米安保条約が最初、締結された時から、アメリカの単独占領であり、且つ、日本全土の占領であって、米軍は何処にでも基地を置けるし、また、訓練も出来るという前提で作られている、そういう枠組みの中で現在の地位協定も運用されているということですね」

水島「はい」

矢野「そういう点では、例えばドイツとかイギリスとか、こういった他の国のアメリカとの地位協定、或いは、その運用実態を見ても、例えば、日本は裁判権が及ばないとか、或いは訓練の区域の使用についても指定区域以外へ出る場合、他の国の場合は大体、その国の政府の許可が要るんですけども、それを許可無しで使えるというようなところもあって、そういう点では非常に従属性が強いと」

水島「はい」

矢野「もう一つ言えることは、単に、そういった法的な安保条約の枠組みだけでは無く、実態に於いて、特に核については全面的に抑止力を一貫してアメリカに依存するという政策

を執って来た。これも核の傘の信頼性というのは常々ここでもお話して来たように、元々原理的に存在しないという見方も出来ますし、現実の核戦力のバランスという点に於いても、もう機能できない信頼性が無いような程、そのアメリカ側が劣勢になってしまっていると。もう、これは現実だと」

水島「うん」

矢野「そういう中で、この核戦力、核抑止力の全面依存っていう政策を欺瞞的に続けていくということであれば、この従属性から脱却できない。しかし、逆に言うと、そこを脱却すれば、日本は自立的な防衛をやる潜在力があると」

水島「うん」

矢野「地政学的にも、それは可能であろうというのが私の結論ですけれども、あと、もう一点は、安保条約自体がそうですが、経済と外交とか価値観の問題。こういった単に狭義の防衛だけではなくて幅広い総合安全保障という観点で、日米間の緊密な関係を規定している条約ですけれども、それが結局、日本の安全保障に於ける依存というものが、例えば金融とか財政の問題、或いは、その他の色んな政治的な、或いは、外交的な日本の自立性というものを大いに縛っていると」

水島「はい」

矢野「それは、今迄も議論に出ている様にグローバリズムという形でアメリカ自身が変質している訳ですけれども、それに引きずられるという要因にもなっていると」

水島「はい」

矢野「正に山中さんが言われるように『アメリカと共に沈む日本』になりつつあると」

水島「はい」

矢野「ここで日米安保というものを、もう一度問い直して、この従属性から脱却しなきゃいけない。日本は、それを脱却することが充分、可能だということ考えております。以上です」

水島「はい。有難うございます。では、山中さん、お願いします」

山中「はい。今、矢野先生がおっしゃった通り、本当に、戦後一貫して、この日本っていう国が未だに元のマッカーサーの居たGHQの軛から逃れられないというか、しっかりと、その中に抑えられているという構図があって、日米地位協定、日米合同委員会といった、いつも継続して行われる中で日本の官僚のトップと米軍のトップ達が色んなものを決めて、そして我々は、ただ、それを押し付けられて吞まされてきていると。

ただね、ここで、ちょっと違った見方をしているんですが、今年は2024年で、やはり、明らかにアメリカの力というものが、過去よりかなり落ちて来ている。それは軍力もそうですけども、金融、経済、様々な世界に於けるアメリカのプレゼンス自体が比較的相当、落ちている。その場合、何処と比較するか。一番、簡単なのは中国になる訳ですけども、第二次大戦の時、全くと言っていいほど自国に損害が無かったのが唯一、アメリカですから、ヨーロッパもロシアも日本もガタガタにやられてしまった訳ですね。

そこで唯一、アメリカだけが単独のヘゲモニーで、ずうっと長くいった訳ですが、まあ、ソビエトっていうのは一応、また直ぐ盛り返して軍事的には、この二大国家で来た訳ですけども…」

水島「うん」

山中「ただ、やはり、ここ20年ぐらいの急速な中国の経済力から軍事力で、あつと言う間に、今、軍事的にも三極のような状態になって、Multiple、つまり、多極化の世界に入ってきている。こういうことを抜きにして、我々の日本とアメリカだけの安保ということは考えられないじゃないかというのが、私の考えです。直近の話で言えば、つい最近の欧州議会ですよね」

水島「うん」

山中「あの欧州議会の選挙の結果も、ここまで一気に、所謂、極右と言われるところと右派と言われるところが一気に伸ばした。まだまだ半分には遠いけど2割ぐらいが一気に取ってしまった」

水島「うん」

山中「そして、一番、負けたのがドイツとフランスであり、フランスのマクロンは一気に、とにかく負けてもいいから、やらざるを得ないと言ってやった結果が、つい、この間、あの6月末の選挙で大敗をした。予想通りですよ。大敗した。イギリスがもう直ぐですね」

水島「うん」

山中「ですからイギリスのスナク首相もマクロンと同じで、もう、あの二人はギャンブルで、やぶれかぶれ解散でと言っていますから、多分、これも間違いなく大敗するであろうと。今のところ、もうイギリスの選挙は既に徐々に始まっていますんでね」

水島「はい」

山中「そうしましたら、ここで面白いのはイギリスなんかはね、イギリス独立党、2016年、独立させたナイジェル・ファラージ (Nigel Paul Farage) に、この間、ちょっと会って来ましたが、彼が一議席を確保して五議席は取るんじゃないかと言われているんですね。

ですから、こういう、まだまだ小さい、しかし、彼はもう一回、保守党を作り替えるって言っていますから、そういった流れが起きている中で、今の保守党は完全にグローバリズムの傘下ですが、ナイジェル・ファラージの独立党は反グローバリズム。トランプと同じですから、2016年のトランプと英国独立党のイギリスの独立から始まった大きな反グローバリズムの流れが、そのままずっと来て、この数年、イタリアとか、フランスのルペンが、かなり勝ったとかいうことが続く中に於いて、やはり大きな世界の流れが変わってきていると思っていますね。

しかし、そういう中で日本は今まで通りだと、アメリカが思っているかもしれないし、日本の外務省も今まで通りだと思っているかもしれないけども、そういう世界の大きな流れの中で反グローバリズムが着実に進む中で、日本は、どういう立場をとるのかって言った時に、間違いなく真っ先に日米安保を、まず見直すっていうところが出て来るという風に考えているんですね。あと、もう一つはブリックス (BRICS)」

水島「うん」

山中「この台頭が思ったよりも非常に大きくなったのは、やはり、この2年半前からのロシア・ウクライナ戦争で、バイデンさんがドルを武器化したっていうことが、やっぱり非常に大きいので、このドルの武器化イコール、ロシア・ルーブルの中央銀行への攻撃だとプーチンは受け取った訳ですから、日本もそれに全部、参加した。日本はもう参戦国だと私は思っております。そしてロシア・ウクライナ戦争は今後、未だ続くし、そして、それは経済戦争の側面が非常にあるから、それによっても一気にブリックスの非ドル化が、どんどん進んでいく中で、やはり私は経済戦争、単純にドンパチの戦争だけじゃなくて情報戦争であり経済戦争であり、今はサイバーでありね、そういう中に於いて、今年、我々日本は、まるで違う世界に入って来ているという中で、この安保が今まで通りに機能するかしないかということも、日本とアメリカだけの間で考えるんじゃないじゃなくて、非常に大きな世界の流れの中で変わってきているという話を我々もしなきゃいけないんじゃないかという風に考えております」

水島「はい。有難うございます。では、藤井さん、お願いします」

藤井「はい。今日のテーマ『日米安保なき世界の可能性』ということで、日米安保っていうものが何かって言うと、今、自民党の中でどうなっているかと言うと、結党の時には、水島さんがおっしゃったように、外国駐留軍の撤退に備えるという大変、立派なことが55年体制では書かれていたんですが、残念ながら立党から50年以上経った2010年の綱領には『日米安全保障条約を基本とする外交政策により平和を守り云々』と書かれてあって、日米安全保障条約というものを軸とした外交を築き上げるんだということが綱領になっちゃったんですね」

水島「うん」

藤井「残念ながら55年体制から55年経った2010年の時には、日米安保条約、即ち、サンフランシスコ講和条約の体制、所謂、戦後レジームを全体にしてレジームと呼ぶと、これはポツダム宣言より更に悪い状況ですけれども、そういうサンフランシスコ講和条約体制から脱却するという意図を自由民主党は無くしてしまっている訳ですね」

水島「そうですね」

藤井「そういう意味があって、私共の雑誌の『表現者クライテリオン』の7月号、丁度、今月号ですけど、タイトルを『自民党は保守政党なのか?』という問いかけに致しました。最初我々は、自由民主党は保守政党ではないっていうタイトルにしようと思ったんですけど、まあ、中には一応、2~3人は居るかもしれませんし（苦笑）、ひょっとしたら、これから変わるかもしれませんから『なのか?』って、お前、解っているかっていう、そういうタイトルにして、保守政党でいて欲しいということを願って書いている訳ですけども、残念ながら、今言った様な日米安保から組み直して、外国駐留軍の撤退を備えるということの意志は、もう粗方、無くなってしまっていると。

そうすると、この自由民主党体制が続く限りに於いて、彼らが抜本的に綱領を変えて、政策の方針を見直すのであれば、日本国政府が『日米安保なき世界の可能性』を模索するという未来は訪れると思うんですけど、残念ながら今の体制では万に一つも無いと言わざるを得ないと思います。この状況、何故、そうなっているかと言うと、そういう自由民主党が支持を受けている事が問題であって、民主党に比べたらマシやろうぐらいの、まあ、蓮舫と小池を比べたら、蓮舫かあ、まあまあ、小池、嘘ついているかもしれんけど、まあええかみみたいな

感じでAが嫌なのかBが嫌なのか、より嫌でない方を取るみたいな政治がずっと続いている訳ですけども、この状況がある限り『日米安保なき世界の可能性』を探ることは、我が国に於いては無いということになってしまいます。

ところが、この番組は、その可能性を探るということを通して、待てば海路の日和ありで、そういう日和が来ることを信じて、今も超少数派で、この部屋から一歩外に出ると、何、言ってるの、あんたって言われるような話を、我々は、今日する訳でありますけども、まあ、その議論をしっかりとやって、そうすると意外と何か待てば海路の日和ありで、日和があれば、日米安保なき世界を考えるということが出て来ると思います。

その可能性を高める為に何が必要かと言うと、まず、皆様方が今おっしゃったように、矢野先生、山中先生がおっしゃったように、日本は属国であると認識していない日本人がビックリするぐらい居る訳ですよ。元々憲法が作られた経緯のことも解ってない。ポツダム宣言違反をしてアメリカ軍がずっと駐留し続けていることを知っている人も居ないし、日本に、アメリカ軍が駐留し続ける時に、米軍と日本政府の間で取り結んだであろうと言われている密約の存在のイメージも全く持たないで、且つ横浜に行っても横須賀に行っても沖縄に行っても、こんな占領されたままで、どう考えても、これは属国というか支配中やないですかと、未だ支配されてますやんということを気づいていない日本人が多いからこそ、保守政党でも何でもない自由民主党が、のうのうと今の状況で存在しているという状況がありますから、少なくとも、この視聴者だけでも日本というのは属国と言うか支配されている状況であって、ですからGHQ体制というものが米軍と政府の間で築き上げられた訳ですけども、一応、アメリカ大統領は向こうに居ますけれども、政府と米軍との関係というものは何ら変わっていないんだということを、日本国民に知って戴くところから始めて貰いたいなど、今日は参上しております。宜しくお願いします」

水島「まあ、本当に、その通りですね。だから、今の時世も、藤井さんが今、指摘したように、よりマシな方とか言うけど、我々が今、言っているのは全部、駄目だっていうのを、勇気を持って認めよう」と

藤井「う～ん」

水島「全部、プロレスのお祭り騒ぎやって民主主義だって言って誤魔化しているんだということまで、そこから出発しないと、おっしゃるように、こっちの方がマシだとかね、そんなものは駄目だと」

藤井「うん」

水島「これは全く藤井さんと同じだけど、これって延命させるだけ」

藤井「そうですね」

水島「今の状態をね」

藤井「そうになっていますね」

水島「だから、もう全部、駄目だっていうことを、やっぱり思い切って認めなきゃいけない。そこから、どうするかっていうことを考えるべきだって、おっしゃる通りだと思いますね。はい。有難うございます。モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。いつも呼んで戴いて有難うございます。まず古川さんにお礼をしたいと思います。この太ったオジサンの似顔絵を描いて下さった古川さん、有難うございます。そっくりです」

一同「(笑)」

モーガン「そっくりです。戴きます。有難うございます」

水島「(笑)」

モーガン「前回、この番組に出演させて戴いた時、私が口の悪い発言を致しました。『オカマ外交』」

水島「(笑)」

モーガン「『妾政治』」

藤井「う～ん (失笑)」

モーガン「そのあと動画を見たら、コメントが、いっぱいあるじゃないですか」

水島「はい」

モーガン「コメントは色々とストレートに書いて下さっているから、私にとっては貴重な情報源です」

水島「はい」

モーガン「まあ、色々な意見があって、一人の方が、モーガンの言っている『オカマ外交』『妾政治』は嫌な言い方ですと」

水島「うん」

モーガン「確かに嫌です。そのようなことを言っちゃいけない。しかし、その同じ方が言ったことが気になっているから、それに答えたいと思います」

水島「うん」

モーガン「自分の国で、そういうことを言って下さいということをおっしゃっていたんですけども。私の言い方は悪いですけども、私は、この番組で日本人に対して話しております。自分の国でも同じことを言っています。日本人に対しても言っています。だから私の国で言って下さいっておっしゃっているんですけども、お断りです」

水島「(笑)」

モーガン「この国が79年経っても独立しようとしめない。一回もしようとしめない」

水島「うん」

モーガン「先程、山中先生がおっしゃった『軛』、正にマッカーサーとGHQが作った『軛』ですけども、途中で『和製軛』になったじゃないかと思っています。今、アメリカは喜んで、この属国日本を使って利用しているんですが、日本人が自ら『軛』を自分の首にかけているという気が致します。藤井先生が編集されているクライテリオン。面白く読ませて戴い



ています」

藤井「ああ、有難うございます」

モーガン「本当に勉強になっております。私の結論は、そもそも自民党が売国奴の受け皿として生まれたと」

藤井「その通りです（苦笑）」

モーガン「CIAプロデュース。あの党は独立するはずがない。今も正にCIAプロデュースの党で…」

藤井「う～ん、そうですねえ」

モーガン「みんな、売国です」

藤井「そうです（苦笑）」

モーガン「今、自民党に残っている政治家は、みんな、売国奴です」

藤井「（苦笑）」

モーガン「もう例外なしです。あのLGBT…」

藤井「先ほど、2～3人は居るかもしれんと言いましたけど（失笑）」

モーガン「居ないです」

藤井「居ない（笑）」

モーガン「ゼロ。ゼロです。あのLGBT法案があつて。あの気持ち悪い法律があつて…」

藤井「気持ち悪い（笑）」

モーガン「党から出ていない人は、もう大丈夫じゃないですよ」

水島「はい。そうですね」

モーガン「売国奴そのものです。だから私、モーガンが『オカマ外交』『妾政治』」

藤井「そうですね」

モーガン「男は居ないです」

藤井「うーん。そうですね（失笑）」

モーガン「じゃあ、どういう国が、この日本を占領しているかという、もう一度、この番組で申し上げたいと思っております。まずドルを武装化とか武器化したという御発言があったと思うんですが、それはその通りですが、初めてドルを武装化したのは、米政府、連邦政府が我々アメリカ国民に対してドルを武装化したんです。それはFellow Reserveということです。100年前のことで、初めて私達の使っている紙幣が連邦政府に偽造されて、その延長線上で今のアメリカ帝国がある訳です。

この日本は、とても良い国です。世界で最も嫌な政府に占領されています。嘘に長けている。

あの大統領討論を見た方は多分、解ると思うんですが、バイデンがその状態だということは、多分、我々も前から知っていると思うんですけれども、アメリカ国民の半分ぐらいが驚いているようです、知らなかったと。日本国民もあれを見て初めて知ったような雰囲気ですけれども、バイデンは前からボケています」

水島「うん」

モーガン「もう施設に入った方がいいです」

藤井「(苦笑)」

モーガン「本当に。それは本当に可哀想なお爺さんになっているので施設に入って載きたい。どういう国かって言うと、例えば、これは、東京新聞で7月2日のものです。今年4月のニュースですが、日本の横田基地に戦略爆撃機B52が来た。核兵器が搭載されているかどうか分からない。日本政府はそれを確かめる権限がないと書いています」

水島「うん」

モーガン「この状態ですよ。もし米政府が核兵器を搭載した爆撃機を横田基地に着陸したいと思ったら自由にできる。通告なしで、お知らせ無しで勝手に入って来て、もし、核戦争がしたいと思ったら、日本政府はやめさせる術が無い訳です。あと、最近、出ている報告書。中間報告書。アメリカ合衆国下院司法委員会と、連邦政府の武装化特別小委員会と情報特別委員会が共同で出している報告書ですけれども、要はCIAが4年前、選挙前に、あのハンター・バイデンのラップトップの件で、CIAが選挙に干渉した」

水島「うん」

モーガン「選挙不正したのはCIAですと、これが米政府の出した報告書です。米政府が私の国でこのようなことをやっています。ということは属国でもやっているんですよ。CIAは、この国の中でやり放題ですよ。CIAのトップは、CIAが選挙に干渉することを事前に判っていた訳です。これ、モーガンの陰謀論じゃないです」

水島「うん」

モーガン「これは米合衆国下院が出している、誰でもダウンロードできるものですよ」

水島「うん」

モーガン「この国が世界で一番、嫌な政府に占領されています」

藤井「うん」

モーガン「日米安保とか日米同盟とか、それは存在しないです。日米同盟というのは、伊藤貫先生が、いつもおっしゃっている二重封じ込めの為で、この日本を抑える為に日米同盟がある訳です。皆様、ご存じかと思うんですけれども、もし、その日米同盟とか安保条約の時代が終わったらどうなるかと。私はその先に待っている未来が輝かしいと思います。よくある会話ですよ。私がいつも親米保守とする会話です」

藤井「うん」

モーガン「あのアメリカは日本人に対してジェノサイドをやったじゃないですかと。ああ、

まあ、そうだね、と認める。あのアメリカは、また、やるじゃないか。いや、そうだね。原爆投下は未だ正当化しようとしているんじゃないですかと。ああ、まあ、それは、そうそう、そうですね。岸田って売国奴じゃないですか。岸田は売国奴！と答えて戴く。じゃあ、独立しようと言ったら、お前は過激だと」

水島「(笑)」

モーガン「それは、ちょっと、この頭では処理出来ない」

水島「そうですね (笑)」

モーガン「何故、私が過激。私は赤軍と言われているんですよ」

水島「そうですね。赤軍…」

モーガン「中国のスパイとか」

水島「赤軍で、過激と言われましたね」

モーガン「そうですね。しかも親米保守に言われているんですよ」

藤井「(笑)」

モーガン「私が言っているのは常識です」

藤井「そうですね (苦笑)」

モーガン「本音を喋っています」

水島「はい」

モーガン「この国が占領されています。日本人に対してジェノサイドをやった連中に占領されています」

藤井「うん、ほんと、そうですね」

モーガン「これは多分、みんな、解ると思います。じゃあ、独立しよう」と

水島「うん」

モーガン「私が当然なことを言っているつもりですけど、もし日本が独立すれば、どういう未来、将来が待っているかって言うと、例えば、まず日米合同委員会が無くなって日本が主権の国になる訳です」

藤井「そうですねえ」

モーガン「主権の国としてグローバルサウスとの関係を築き直すことが出来る。日本人は、白人じゃないです。名誉白人でもないです」

水島「うん」

モーガン「あのワシントンには非白人を殺すことが趣味です。何回も言っているんですけど、歴史を見て下さい。今の地図を見て下さい。あのワシントンとワシントンの連中は、白人ではない人を散々殺しています。ベトナムの歴史を見て下さい。この日本の歴史を見て下

さい。じゃあ、もしグローバルサウスとの関係を築き直すことが出来たら、それは、今の日本と戦前と戦中の日本の大義が一致して一貫性を持つというか、自然の姿に戻ると思います。あと米政府が明らかにロシアに仕掛けている核戦争」

水島「うん」

モーガン「そこに巻き込まれない訳です。もし独立が出来たら、日本人の命が救われる訳です。あと拉致被害者。拉致被害者はワシントンに居ないですよ」

水島「うん」

モーガン「北朝鮮に居ます」

水島「うん」

モーガン「何故、拝米保守はワシントンに駆けつけて、米大統領にお願いしますって。拉致被害者はワシントンに居ないですよ」

藤井「(苦笑)」

モーガン「北朝鮮に居ます。じゃあ、誰が金正恩に影響力を持っているかって言うと、あのプーチンじゃないですか。プーチンにお願いして、金正恩に話をしてくれと交渉しよう。あの拉致被害者の人々を解放してくれ。代わりに何が欲しいかっていう具体的な話が出るはず。米が入って来ると、色んな日本の利益にはならない条件が付くので、拉致被害者を救いたいと思ったら主権国家として米を裏切って、あの人々を救済しましょう」

水島「うん」

モーガン「あと名前は言わないですけども原口先生が、いつも、おっしゃっている、あの薬。日本人は今、モルモットです」

水島「うん」

モーガン「これから、もっとモルモットになるんです。米のサイコパスと日本国内の売国奴と臆病者の協力で、日本国民はもっと死ぬんですよ。あの薬の関係で。モルモットから脱却して脱モルモットのことが出来ると思います」

水島「うん」

モーガン「あと、金融と財政の側面も独立して、日本円問題を自由に解決できるじゃないですか。あと日本の国債とか。その様な問題がスッキリすると思います。最後に何が出来るかと言うと、こういうことを言うとモーガンは本当に過激だと言われるんですが、それでも、いいですよ。覚悟しています。この日本は普通の国じゃないですよ」

藤井「うん。そうです」

モーガン「これは深刻じゃないですか。神々の国」

藤井「うん」

モーガン「そういうことを言ったら拝米保守が、モーガンを笑っているんですが、それは、いいんですよ。私は、ここが聖地だと理解しております。この聖地が穢れを受けている訳で

す」

水島「うん」

モーガン「この基地が穢れじゃないですか」

藤井「本当にそうです」

モーガン「この間、水島社長が多分、おっしゃったかと思うんですけども、米軍が帰ったらお祓いをした方がいいと。天皇陛下がそこに行かれて清めるっていう役割」

水島「ああ、行幸啓をなさっているのは、特に昭和天皇が敗戦後に各地を周ったのは、人々を励ますのではなくて、そこに足を踏むことによって、全部、お清めをしている」

モーガン「はい」

水島「お祓いをしているっていう、そういう天皇の行幸啓というのは本来、そういう意味を持っているっていうことですね」

モーガン「はい。私もそう思いますし、あの米軍基地が日本の恥ですし、それだけじゃなくて精神的な穢れ、汚れたと思ってお祓いをすればいいと思いますよ。そうすると、この日本が、また日本になる訳じゃないですか。何故、このような顔をしている人間が、そういうことを言わなければならないかと（苦笑）」

水島「(笑)」

モーガン「何故、この国の良さに気づいて下さらないのかと歯痒いですけども、嫌なことかもしれないですけども、私は過激な事を喋り続けますので、視聴して下さっている方々は覚悟して戴きたいと思います。未来が輝かしいと思っています。以上です」

水島「はい。本当に今、おっしゃって戴いたように、例えばハンチントンとかね、あれは、完全に日本の文明っていうのは独自のものだって。あの『文明の衝突』という本を読んでいる人は多いんですよ。でも単なる本当に、学問的な頭で思っている。でも、この間紹介したロシアのアレクサンドル・ドゥーギンという学者の書いたものを見れば、日本の馬鹿学者達よりも遥かに日本の事を解っていると思います。

だから今、我々は、そういうことを、しっかり理解しなきゃいけないと思いますね。日本の政治家や学者、特に文科系の学者っていうのかな、政治学者もそうでしょうけども本当に、あれを読んだら圧倒されますよ。それだけ日本の文化や伝統とかのことを、よく解っている。だから逆にモーガンさんから学ばなきゃいけないっていうのは、そういうところですよ」

モーガン「いやいや、いや。そんなことない。はい」

水島「顔つきが違うからって言っていましたけど(笑) 本当に、そういう意味では、今、我々が勉強しなきゃいけないのは、そういうところもあると思いますね」

モーガン「私が、クライテリオンの中で好きだったのは山口先生の和辻哲郎に関する風土」

藤井「うん」

モーガン「これは面白かったですよ」

藤井「ああ、有難うございます」

モーガン「雑誌の中には、このような文化に関する記事があるんですよ」

藤井「うん」

モーガン「探せばあると思いますが、私は勉強中ということで。有難うございます」

水島「はい。これも、あとで出来たらですけど、今、500年も続いた白人系の近代文明と言われるもの自体が、もう限界に来ているっていうね」

モーガン「はい」

水島「文化人類学的な意味でもね、世界が変わりつつある。政治経済だけじゃなくて、そういうところも届けば、そこまで行きたいと思います。有難うございます。じゃあ、折本さん、お願いします」

折本「今日は、どうも有難うございます」

水島「はい、どうも」

折本「今日は7月4日ということで、実は、アメリカの独立記念日だということですがけれども、丁度、1年前に私は米国大使館に行きまして、今のラーム・エマニュエル駐日大使に対する抗議活動をしに行きました」

水島「やりましたね、そう言えばね。はい」

折本「はい。丁度1年前に抗議をしまして、と言いますのも、それに先立つ6月ですかね、国会で、あのLGBT理解増進法が成立しまして、それはエマニュエル大使が、岸田首相に日本はG7の中で唯一差別禁止法が無いから創れということで指図、内政干渉をして、無理矢理、創らせた。国会の中でも殆ど議論をしないまま、自民党の議員は、ほぼ全員、賛成して可決成立してしまったと」

水島「うん」

折本「それに対して、やはり、国民として、しっかりとエマニュエル大使の内政干渉に対して抗議をしに行かなければいけないということで、皆さんに呼びかけて、駐日米国大使館に行って参りました。水島社長にも賛同人になって戴きまして、本当に、どうも有難うございました」

水島「私もやりました」

折本「はい」

水島「20年、色々な政策反対の運動をしたけど、大使館前で、こら、エマニュエルって言ったのは初めてでしたね」

折本「ああ、はい」

水島「はい（笑）」

折本「それで、その時、抗議文を持っていったんですけども受け取って貰うことも出来な

くて、最終的には記録郵便で送ったら受理されたんですけども、今迄、何のレスポンスも無いような状況であります」

水島「はい」

折本「やはり、何が一番問題かと言うと、やっぱり相手国の主権や文化をないがしろに、踏みにじり、冒瀆する行為であるということに対して、しっかり抗議しなきゃいけないということで行って参りました。

これまでは、やはりアメリカって言うと、日米同盟っていう言葉の中でアメリカは庇護者だという風に思われていたんですけども、最近のアメリカっていうのは、もう侵略者になってしまったなど。まあ、元々そうだったんでしょうけども」

水島「うん」

折本「要は、その化けの皮が剥がれて、正体を顕わにして来たなあという風に思います。で、あのLGBT法案が成立したあと、エマニュエル大使が、日本国民は今、進化の過程にあるという風に言ったということであ…」

一同「(失笑)」

折本「これも、あり得ない話でして、要は、日本人は未だ人間ですらないと、猿だと。或いは、イエローモンキーだけれども、ようやく白人に近づいてきたという、根本に人種的な偏見とか、そういう歪んだ進歩史観みたいなものがあるんじゃないかなと。これは、やはり、我が国に原爆を落としたアメリカ人の精神構造と同じではないのかなあという風にも思います。平然と、例えば、LGBTにしても都内で一国の大使が政治活動をやってLGBTのデモに参加したり、或いは、親イスラエルのデモに参加したり、正に日本を属国としか思っていない。

G7の際もバイデンが来日した時にも横田基地まで出迎えに行って、成田や羽田ではなくて横田から入って来ると。要は、首相ではなくて大使が出迎える。正に厚木に降り立つマッカーサーを彷彿させるような状況が未だに続いているっていうことに対しても、やはり、我が国、日本の主権や文化を全く尊重していないということの表れだと思います。

だから、こういう傲慢な占領者、侵略者に対して、やはり、しっかり抗議しなければいけないし、我々は排除して、真の意味での独立を取り戻していかなければいけない。そして反米ではなくて、お互いの主権や文化を尊重し合う真に対等な日米関係を築いていかなければいけないということで、こういう行動を起こしました」

水島「そうですね」

折本「戦後、日米同盟、日米安保条約というのは、所謂、国際共産主義の脅威に対する一つの防波堤という役割があったと思うんです。ただ、やはり冷戦が終結した時に、日米安保の歴史的な役割は終わったと思うんですね。その時点で、本来であるならば在日米軍は撤退して、日本が自立する」

水島「うん」

折本「軍事的にも自立して、主権国家としての独立を取り戻すタイミングだったと思います。しかし、結局、その時の日本政府の指導者達が独立を選ばずに、むしろ米国の足にしがみつ

いて引き続き守って下さいということで、結局、だらだらと日米安保再定義とか言って続けてしまったと」

水島「うん」

折本「冷戦の状況下では、やはりソ連という共通の敵が居たので、わりかし日本の相対的なポジションっていうのは、アメリカに対しては強かったと思うんですね」

水島「うん」

折本「ただ、結局、冷戦が終わったあとで今度は仮想敵が日本になってしまったので、戦後の高度成長で、ぶくぶく太った日本を今度は搾取してやろうということで、まあ、豚は太ってから食えではないですけども、そういう形で日本に対する攻勢が非常に強まっていた。そこで80年代後半から、例えば日米構造協議であったりとか、或いは、年次改革要望書のようなものが出されて、むしろ日米安保は、今度は新自由主義的な構造改革であったりとか、或いは、グローバル政策を推し進める訳ですね。その権力装置になってしまったということだと思います。

そこで食い尽くされて、今日の悲惨な我が国の姿があるということだと思います。ですから、この今のグローバリズムの餌食になっている日本の根底には、やはり、対米従属があり、その根源には日米安保があるんだということを、しっかりと自覚しなければいけないという風に思います。今、経済的な話をしましたけども、一番、大きな日米安保の問題は何なのかと言うと、やはり、これは、あくまでも日米安全保障条約というのが、アメリカにとっては、日本の天皇、皇室を中心とした、そういう古来の国体を封じ込める為の権力装置なんだということ認識しなければいけないと思います。

お互いにウィンウィンな条約ではないということで、あくまでも、日本が二度と自立で再軍備して自立できないように軍事的にも精神的にも封じ込める。抑えつける為の権力装置として日米安保があるんだということを、我々は自覚しなければいけない。事実、日米安保の前文には、こういう風に書いてあります。

『両国の間に伝統的に存在する平和、及び、友好の関係を強化し、並びに民主主義の諸原則、個人の自由、及び法の支配を擁護することを希望し云々』っていう風に書いてある。つまり、この条約っていうのは、あくまでもアメリカ的な意味での自由と民主主義を守る為の条約だということが謳われている訳であって、そういう理念に基づいた条約だということです。

それはアメリカの言う自由や民主主義っていうのは本来、我が国の天皇を中心とした国体とは相容れないものであって、だから今、安保条約も冷戦の時だったから良かったとか、じゃあ、例えばチャイナが台頭して攻めて来るかも分からないから、今のままでいいんだっていう話ではないと思いますね。やはり、安全保障を論じる上に於いて、我々は一体、何を守るべきなのか。いかなる価値を守るべきなのかという議論を今こそしなければいけないと思います。

それこそが正に国体ということであって、幕末の水戸藩で会沢正志斎という人が居ましたけども、その人は、大津村の沖にイギリス船が現れて上陸して来た時に、この侵略の意図を感じ取ってリアリズムに基づいた国防論の『新論』っていう本を書いたのが1825年、文政8年に出した訳です。リアリズムに基づいて、内外の情勢を客観的に分析して政策を包括的に論じた本ですけども、重要なのは、最初に国体を論じているんですよ。まず国体と



は何ぞやという議論から始めている訳です。

これが水戸学の特徴ですけれども、つまり、ただ単にチャイナがのして来たから、日米安保を強化しなければいけないとか、こういう小手先の議論をいつまでも続けていてはいけない訳であって、その為に日米安保や日米同盟が重要だっという話になったら、いつまで経っても我々は独立できない」

水島「うん」

折本「自立できない。ひたすらチャイナが強くなればなる程、我々は対米従属を強めるしかなくなってしまう。事大主義に陥ってしまうっていうことだと思います。だからこそ、一体、我々は安全保障によって、いかなる価値を守るのか、我が国の国体とは何ぞやという議論を今こそ、やらなければいけないということだという風に思います。因みに最後ですが、今日は7月4日で独立記念日という風に申しましたけども、実は大楠公の新暦の命日でもありまして、湊川の戦いで楠木正成公が討ち死にをした日だということですね。大楠公は、ご承知の様に『七生報国』ですね、七度生まれ変わってでも、朝敵を滅ぼすという遺言を残して亡くなった方です。

ですから我々の先人達が、そういう屍を乗り越えて、その国体を守ってきた。今こそ、この大楠公の精神に立ち返って、正に国体を冒瀆する勢力を滅ぼさなければならないという風に、私は思います。以上です」

水島「はい。どうも有難う。では、エルドリッチさん、お願いします」

エルドリッチ「はい。有難うございます。私の冒頭の発言を始まる前に、今、折本議員の発言について二つの質問があります。今のご説明が非常に解り易かったですけれども、いつから、こういう風に思うようになったのかが、まず一点目の質問。二つ目が先生の周りに同じような意見を持つ方が、どのぐらい、いらっしゃるんでしょうか」

水島「じゃあ、折本さん」

折本「はい、そうですね、私は大学生の時に色々政治思想等を勉強しておりましたので、例えば、今の安全保障条約もそうですし、憲法であるとか、その根底にある思想や哲学、価値観みたいなものを学ぶ内に、それが根本的な我が国の歴史に基づいた国体であり価値観とは相容れないなということを感じたと言いますか、思い立ったというところでもあります」

水島「なるほどね」

折本「あとは仲間ですけれども、今、そういう議員だとか政治家の中では殆どいらっしゃらないなあとということなので、私も無所属という立場で孤軍奮闘してやっているような状況であります。はい」

水島「はい」

エルドリッチ「有難うございます。何故、特に二つ目のご質問をさせて戴いたかと言いますと、私は以前、アメリカ政府に二回ぐらい勤めていたけれども、個別で色んな議員の方々と意見交換する訳ですけれども、先生と似ているご意見を持つ、所謂、右の方、左の方々がいらっしゃるけれども、公の場になると、みんな、中々言わない。そこで、アメリカ政府の関係者が、日本人の本音を聞けないのは、私の長年の不満だった。

同盟関係にしても友好関係にしても、やっぱり一番根底になっているのは、事実と信頼関係だという風に思っています。つまり本音で語れる日米関係、日米同盟が未だ出来ていないという風に感じています。そこで皆さんの議論とか意見が非常に、なるほどと参考にさせて戴いたんですけれども、色んな話を提供したいと思っているんですけれども、基本的に皆さんの意見には殆ど賛同できると思います。

例えば、今、アメリカが頼られない国になっている。これも昔から言っているんですけれども、特に今の認知症のバイデン政権中には、これも明確になっている。多分、山中先生が、お話していた通りです。世界に於いてアメリカは、非常に外交的に弱くなっている。軍事的にも、実は弱くなっている。私は今、台湾に住んでいるんですけれども、台湾に約束している武器が中々届かない状態です。あと、経済的、サプライチェーン的、または、本来、アメリカを尊敬出来た価値観が、もう完全に狂ってしまった状態になっている。

だから頼られない国になっている。そして、特に矢野先生、そして藤井先生、モーガン先生も触れていたんですけれども、やはり日米同盟によって日本が失われたことが、実は沢山ある。得たことも沢山あるんですけれども、失われたことも沢山ある。そういう風に感じています。特にその主権、主体性、軍の指揮統制、そして自信が無くなったということが言えるという風に思っています。だから過剰な依存は、極めて危険だという風に思っています。

そして日米安保そのものについての事実関係を整理したいと思っています。まず殆ど知られていないんですけれども、日米同盟は、実は日本政府が提案したものだった。1947年9月に当時の外務大臣、芦田仁外相がアメリカ側にこれを提案した。

そのあと1950年の春に、吉田茂が基地を講和後に提供することを申し出したんですけれども、一般的にアメリカが押し付けたものだと思われるんですけれども、実は、日本政府が提案した。当時の情勢の判断だったという風に思っています。そこで、元々日米同盟は永久的なものになるものではなく、暫時的なもの、ある段階的なものに過ぎない予定だったんですけれども、でも、いつの間にか、75年ぐらいになろうとしているんですけれども、その中で日本がどんどん主体性、主権を失っていくという感じがする。

最も早い段階で主権っていうか、そのチャンスを失ったのが1952年、講和条約が発効している時に、実は沖縄を返還する話もあった。でも、結局、ワシントンの方の統合参謀本部がそれを反対した。マッカーサーの後任、リッジウェイ (Matthew Bunker Ridgway) 司令官が極東軍の司令部の中で、もう沖縄返還をしていい。そういう結論をワシントンに伝えたんですけれども、残念ながらワシントンは違う判断をした。

もし1952年4月に日本が再び国際社会に復帰すると共に、沖縄も日本の一部として残っていたら、やっぱり戦後が大分、違っていたと思う。もう一つは、戦後、大きなチャンスを失ったと思うのは、安保改定の時だった。その時も沖縄の返還の話があった訳なんですけれども、当時、日本の国会に於いて、特に野党が沖縄を返還することによって、日本が引き受ける防衛義務を果たせないの、或いは、果たしたくないの、返還は断った方がいい。当時、1959～60年に、そういう風に結論した。

だから、それで凄いチャンスを失ってしまったんだなあと思っています。そのあと64年に、これは大平外務大臣がライシャワー大使と、ある事案について議論していたんですけれども、日本政府はライシャワー大使に対して新しい武器、沖縄に於ける武器の配備は知りたくない、言わないで欲しいということも言った。ライシャワー大使がワシントンに対して、私の結論

は、日本が知りたくないと言うので知らせない方がいいと。

彼が当時、使っていた言葉が『The Less said the Better』、なるべく言わない方がいい。これが日本の要望したものだった。だから、そういうような問題がある。勿論、アメリカにも問題があるんですけども、日本にも問題がある。多分、この5～6人の間で、唯一、日米合同委員会に参加したのは、私だけだと思うんですけども、言われている程、怖い組織ではないと言えるとと思うんですけども、だけれども、やはり運用上、問題があります。

特に私は25年前から長年、公で提言しているのは、日米合同委員会で決めている事を公開すること、そして説明責任を持つこと。あるいは少なくとも、この日米合同委員会で議論している基地、施設が関係する周りの地方自治体、場合によって都道府県でもあり、実際の地元の自治体の代表の方々が、その部分の合同委員会に参加、出席する必要性があると思っています。

そうすると、更に透明性が出来るという風に強く感じています。要するに、この同盟には色んな議論があると思うんですけど、私は日米同盟が必要だと思っています。しかし同盟の管理に沢山の問題が存在している。やはり、そこで誠意をもって議論すべきという風に思っているんですけども、今の日本政府、先程、自民党の問題の話があったんですけども、外務省にしても与党にしても、或いは防衛省にしても、エリートの人達が集まっている。彼らは、こういう問題を起こすような事はやりたくない。結局、冒頭で申し上げていたように、問題を起こさないことで、とても対等な関係の道は開けない」

水島「うん」

エルドリッチ「だから本音で言って、ぶつかって、みんなが、より納得できる関係を作るべきだという風に思っています。日米同盟が無くなる日に考えられる4つのシナリオについて、あとでお話したいと思っています。以上です」

水島「はい。どうも有難うございます。これは、エルドリッチさんの『中国の脅威に向ける新日米同盟』という題名の本で、今のお話も多分、その線に副った本だと思います。失礼ながら未だ読んでいないので分からないですけど『新日米同盟』ですからね、おっしゃるように、そういう中国の脅威があるからっていうことであります。はい。

エルドリッチさんね、私も今、初めて、最初の安保条約の時に、政治家達からお願いしますと、日本側から要請したということを知りました。それが事実だとしたら、こんな奴ばかりだったんだということですよ。日本人の政治家の中に、植民地根性を持った奴隷根性の政治家ばかりが居たっていうことになると思いますね。事実としてもね。だから、それが、ずうっと続いているっていうね」

エルドリッチ「これが事実ですけども、何故、そのように提案したかと言うと、その時は1947年の夏ですけども、国連に日本の安全保障を委ねる予定だった。つまり、その年の5月に新しい憲法が施行されて、まあ、第9条の問題があるんですけども、日本は、非武装化されてしまったので、安全保障は、要するに自分達で出来ないのを国連にお願いしたら、早期講和を1947年8月に実施しようとしたら、旧ソ連が、それをボイコットした。

それで旧ソ連、現在のロシアが常任理事国ですので、日本政府は、その常任理事国に日本の安全保障は任せられないと思って、そこで完全にアメリカの方にシフトしたという経緯だった」

水島「まあ、実際、そうですね。我々が解っているのは、西尾幹二先生がやったように、アメリカの占領軍が7千5百冊を焚書にしたと。実は、私の社長室の中に2千5百冊ぐらい、古本屋から集めた本がありますけれども、やっぱり、今、そういう状態ですよ。

エルドリッチさんが言ったように、もう、どうしようもないような雁字搦めの状態に追い込まれていたという、選択肢があまり無かったっていう言い方になると思いますけど、ただ、私達は、やっぱり今聞くと、情けないなと」

藤井「いや、全く、その通りですよ」

水島「ね」

藤井「今日はジェysonさんとエルドリッチさんの御発言を伺って、極めて一言一句、その通りだなと思うことを、ずっとおっしゃっていると思うんですね。まあ、ジェysonさんは、先程、そんなことを言ったら赤だとか極端だとか言われるとおっしゃいましたけど、心を素にして聞けば、いや、それはもうオカマ外交と言われてもしょうがないと言うか…」

モーガン「でしょう（苦笑）」

藤井「それ以外の解釈する奴は、頭がおかしいんじゃないかっていうぐらいの…」

モーガン「いや、そう思います」

水島「いや、そうですね」

藤井「うん。素直におっしゃって戴いているだけで、極端とか極端でないかなんていうのは、どうでもよくて、素直なことをおっしゃっているだけだと思いますよね。しかもエルドリッチさんが先程、おっしゃった1947年に芦田氏が、ああ、1947年以降ですね。47年から52年迄の間に芦田修正をされた芦田さんですよ。彼が日米安保を提案して、それは、あの時の現実的判断だったとは言え、しかしながら、いくらなんでも外国軍に居て戴いて守って戴くなんていうことを、しかも、あの戦った米軍に頭を下げてお願いをするなんていうのは、もう正気の沙汰とは思えないですよ」

水島「うん」

藤井「確かにソ連の脅威があったとは言え、いや、それは本当に恥ずかしいとしか言いようが無いですよ。しかも100歩譲って、ソ連からの侵略が、それこそ占守島から北方領土、北海道へと北の脅威っていうのは実際にあったから、それに対抗するにはアメリカと同盟をせざるを得なかったという判断が、時の吉田さんを中心にあったとしても、あくまでも時限立法であって60年安保、70年安保で、80年とか90年だってあったはずですよ。

ところが70年安保の時までは何かお祭り騒ぎはあった訳ですが、それ以降は、もう何も無くなってしまって、もう経済が成長したからと言って、まあ、ジュリアナ東京だ何だとか叫んでITだなんだとか言って遊び惚けとる訳ですよ。いや、ほんとに恥ずかしいとしか言いようが無いですよ。ここで、僕が申し上げたいのは、恐らくジェysonさんも、それからエルドリッチさんも、どういうことやろうと不思議に思っているらっしゃると思うんですが、この答を、僕は本当に恥ずかしいと思いながら申し上げると、最近、書いた対米従属文学論っていう文学の本を出したんですけども、これは旅路と文化論を纏めた本を浜崎さんと纏めて出したんですが、その中に『俘虜記』という小説。これは大岡正平ですよ」

水島「そうですね」

藤井「大岡正平の『俘虜記』を纏めた、それはフィリピン戦に於ける戦いの時にアメリカ軍が日本軍、日本の兵隊を纏める所を作って、そこで捕虜収容所をやっていた訳ですね。で、二十代ぐらいのアメリカ軍の将校が、その捕虜収容所を纏めているんですが、その様子を、この大岡正平が纏めています、あれは実際に実体験だと思いますけど」

水島「相当、正確に書こうとしていると思いますね」

藤井「そうですね。あの状況が今の日本の状況だと、僕は思うんです。その状況が一体、どういうことかと言うと、それまでは物凄い上官が居たりとか一兵卒が居たりとか、軍曹が居たりとかして、お前えっ、貴様っ、ビシャツとかって殴ったりして、鬼畜米とか言っていた癖に、もう捕虜になった瞬間に全部、忘れてしまって、それで、もう何かコンビーフとポテトとベーコンか何か毎日、食わされて、食わされてというか食べさせて戴いてでしょうけど、それまでは木の根とか何かを食べてガリガリだった奴が捕虜収容所にひと月ぐらい居ると、みんなプクウ〜ッと太ってね。

朝から晩まで仕事も無いですから捕虜収容所なんて何の目的も無いし、することも無いから夕方にボールを渡されてボールを蹴って遊んだりとかしてね、そうしたら、その捕虜収容所の奴らっていうのは、鬼畜米だあつとか我が日本帝国はあーつとか言っていた癖に、殆どが、あそこのトンネル、あそこの山の脇に洞穴があって、あそこに居ますから、あそこへ行ったらいいですよとか米軍に言って、もう裏切りまくって、それで、つい昨日まで戦っていた奴が、もう我先にと疑って、それは何故かと言うと、捕虜収容所で、より一層美味しいベーコンを食わして貰うとかね、何かそういうものの為に売国しまくりおった訳ですよ」

水島「うん」

藤井「それで大岡正平がふざけるなあつと思って、でも、ふざけるなと思っていた日本人は、それこそ折本さんですね」

折本「はい」

藤井「折本さんみたいな方は居ない訳ですよ。で、みんな、もうベーコン食いたいとか、ポテト喰わしてくれとか言うとして、それで大岡正平が俺も喋れんかった、ふざけるなって思っていたんだけど、友達は誰も居なかったけど、何処かの田舎の散髪屋か何とか屋だけが、同じような目つきをしていて、声をかけたら本当に許せませんねと言って、その人、一人だけ居て。あとは、もう何か、もうベーコン食って美味しいなあとか言って生きていると。それで大岡正平は最後に何て言ったかって言うと、これが今の日本なのだ！」

水島「うん」

藤井「恥を知れ！ということを使った訳です」

水島「うん」

藤井「だから、あの戦前の国体教育を相当受けた日本軍、日本兵なんていうのは、その中で最も、そういう教育がされていた人間だけど、捕虜収容所に入った瞬間、ほんとに鬼畜以下のねえ、いやあ、本当に僕は恥ずかしい」

水島「うん」

藤井「だから、本日はジェイソンさんとエルドリッチさんに本当に我が日本人として、このような日本人としての為の発言を載いてね、もう恥ずかしくて仕方がないのと、並びに御礼を申し上げるしか出来ないですけど、何とか捕虜収容所の中の大岡正平とか、その大岡正平と唯一心が通じた人間のような人間を増やしていつて何とか対等に、勿論、ジェイソンさんなり、それからエルドリッチさんなりっていうのは核についても色々とお考えはあるだろうし、それでアメリカの軛もあるだろうし、アメリカはアメリカの正義もあったということもあるだろうけど、日本には日本の正義もあったということで、決して我々の主張をね、それこそ米国のホワイトハウスで主張したって、僕はアメリカ人というのはそれを頭ごなしに否定する程、野蛮な人達だとは思わない。

こちらが毅然とすればね。それは殺しに来ることがあるだろうかもしれないけど、100人おったら100人とも殺すことは無いと思いますよ。そういう日本人が増えれば、僕は未だ何とかなると思いたいんじゃないじゃなくて本当に思いますよ。僕はそうしてやる。それは勿論。で、そうなれば、もうオカマ外交、妾政治（苦笑）」

一同「（苦笑）」

藤井「そういう恥ずかしい言葉を撥ね除けるような状況になるだろうし、それを、ここまでご縁を載いているモーガンさんなりエルドリッチさんなりに、僕は日本人として返して差し上げたいなと思いますね」

水島「そうですね。丁度、その『俘虜記』もそうですし、ロシアで言うと、ソルジェニーツィンの『収容所列島』とか『イワン・デニソビッチの一日』とかね、こういった収容所に入れられると、人間はどういう態度になるかっていう、私は『俘虜記』もそうですけど、ソルジェニーツィンの『収容所列島』には相当、影響を受けた人間でね、それは、ロシア人の反応ですよ。でも、そういう今、言ったことも含めて、日本人は、また状況が変わると、また変わるんですよ。愛国、帝国、こんな風に敬礼をし始めるというようなね」

藤井「う～ん…」

水島「その中の自分達を感じている無常というかね、こういうものとかっていうのを含めて、それから、もう一つは教育っていう言い方があるけども、サイデンステッカーさんとかね、ああいう人達が死体になった日本兵の日記とかを全部、調べ上げてどんなことを考えていたかを調査した。ただ、それで日本文学に関心を持つようになった。それは何故かと言ったら、あの当時は庶民レベルの人達が、所謂、ノーブレスオブリージュみたいなね」

藤井「そうですね」

水島「そういう家族を想い、国を思い、それから文字を読み書き、下手上手は別として短歌とか俳句まで書いている。これが二等兵、一等兵の最下級の兵隊さん達がそうだったっていうね。だから、それぞれの思いを持ってやるということになった時、今、その『俘虜記』の問題もそうだし、戦後の日本人の与えられたもの、つまり軍隊が駄目ならお金儲けして頑張ればいいみたいなね、そういうような色んな考え方があってね、ただ、私は、全く藤井さんと同じ意見なんだけども…」

藤井「うん」

水島「もうちょっと一つだけ、我々は東京大空襲の時、一晩で10万人が殺されたんですよ」

藤井「そうですね」

水島「ジェノサイドだった」

藤井「そうですよ」

水島「それで広島で20万人が殺された」

藤井「そうです」

水島「長崎では10万人が殺された。これは、どんな野蛮な奴よりも酷いことを、アメリカがやったということだけは踏まえなきゃいけない」

藤井「そうですね」

水島「私は別に反米、反米なんて言うつもりはないけど、こういうものは、どの国でも行うし、アメリカはずうっと行って来たしね、他の国も中国もやり兼ねないし色んなこともあるけれども、そののところが踏まえてね、私達の国の安全保障っていうのを考えなきゃいけないっていうかね、だから誰も頼りにならないっていうことですよ。他の国に頼る訳に行かないから、自分で何かやるしかないというね」

藤井「そうです。絶対にそうです」

水島「その形でパートナーとしての何かね…」

藤井「そうです」

水島「相互防衛条約とか色んなものがあるかも分からんけども、片務的なものだと、やっぱり難しいっていうことだと思いますね。はい、矢野さん、どうぞ」

矢野「同盟というものについて、何故、同盟を結ぶのかというと、相手に対する恐怖というのがあると思うんですね。つまり敵にした時に何をやるか分からないという恐怖が骨の髄まで沁み込んでいるから、アメリカを敵にしたら大変だという暗黙の合意っていうのが指導層にも民衆にもあってですね…」

水島「あったでしょうね」

矢野「さっきから言われるオカマ、妾だって言われるような為体の、全く自主性を放棄したような外交安全保障政策を、戦後、日本は執って来たと思います。だから、日米安保条約の根底には日本として、日本の立場で言えば、二度とアメリカから戦争を仕掛けられないと、同盟国として、しがみついておけば攻められる恐れは無いと、大東亜戦争中に沁み込んだアメリカの残虐なジェノサイドの記憶、その裏返しとしてアメリカとの同盟という側面も、かなりあると思うんです」

藤井「ああ、それは、そうですね」

水島「それは、そうですね」

矢野「それで日米安保について一番、初めに誰が言ったかっていうと、昭和天皇だと、私は聞いているんですけども、昭和天皇が大東亜戦争の開戦劈頭でも、米に対する開戦は、最後まで反対されたんですけども、戦後もやはりアメリカとの関係っていうものを非常に重視されて、二度とアメリカを敵にしてはいけないということで、日米安保を提案されたとい

う風に、私は聞いているんですけども、それは政治家、吉田茂が受けてやったんですがね。ただ吉田のやり方は売国的で、私が許せないと思うのは、自ら降りてしまって全土占領とか…」

水島「うん」

矢野「それから、さっき言った様な従属性を進んでやったと。それから再軍備の問題についても、軍嫌いっていうこともあったんでしょうけれども、その機会も潰した。会見もやらなかったと。これは吉田のその時の政治的なパフォーマンスの結果であって、その罪は重いと思うんですけども、根本的には、やはり、昭和天皇のご意向というか、この二度とアメリカを敵にしていけないというアメリカに対する恐怖というか、それが未だに指導層の中にずうっと引き継がれているんだと。

だから、逆らうと、もう我々は勝てないという一種の諦めというか、国家として国力としての限界というものが沁み込んでいるんじゃないかと思います。そういう点で、今、変わりつつあるのは何かと言うと、先程から皆さんが言われている様に、それ程、アメリカの力が怖くなくなってきたと。言い換えると、つまり日本は自立しないと、今度はアメリカじゃなくて、他の勢力によって、特に中国によって呑み込まれる、そういう時代に、もう変わっていると。

つまり安全保障関係は大きく変わっているのにも拘らず、依然としてかつてのアメリカ恐怖症のトラウマが未だ指導層に沁み込んでいるし、それから国民も大半が、そういうものだと思込んでいる。或いは、教育、メディアの洗脳もあって、そういう風に思いこまされていると。だから客観情勢がこれだけ変化しても、それが見えない。或いは、見ようとしなないというのが続いていると思うんですね。

だから、そこを破ろうと思ったら、やっぱりアメリカは頼りにならないということが日本人全体に、はっきり判ること、例えば、いきなり中国に尖閣を取られて、アメリカが全く動かなかったとかですね。だけど日米安保条約の条文を見ると、それはアメリカ側としてはやらなくていいように、ちゃんと仕組んである訳です。そういう条文になっている訳ですよ。

例えば第5条のところで『自国の平和、及び安全を危うくするものであることを認め』という条文があるんですね。だから尖閣を取られたからといって、アメリカの平和とか安全に何の影響があるんだと。全く関係無いんですよね」

水島「うん」

矢野「そうであれば、この第5条も発動されない。施政下に有る無しという問題もありますけど、それ以前に、アメリカから見て日本が無人島で放置している離島を、何故、アメリカの平和・安全に関係があるんだと」

水島「うん」

矢野「軍事力を使って、それを支援しなきゃならないんだっていう論理が、この安保条約の条文の中にもう既に入っている訳ですよ。だから、さっき言われたように、この安保条約自体も、1年の事前通告で、いつでも廃棄できると。NATOと違って自動的に軍事介入するというような条項は全く無くて、あくまでも、今、認めて、それから施政下の領域にあって、それぞれの憲法上の規定や手続きに従ってやるという、もう何重にも歯止めがかかっている訳で、日本人が思っている程、日米安保っていうものは、堅固なものじゃないです。



非常にコミットメントの度合いも少ないし、更に輪をかけて、新しいガイドラインなんかを見ると、特に日本有事の場合は、陸海空とも自衛隊が主体的に作戦を行うことになっているんですね。アメリカ軍は、それを支援、或いは補完するとなっています。打撃力についても、この一部は、打撃力の行使は領域横断的作戦の場合、と書いていますけれども、基本的には、国土回復についても日本側が責任を持つという仕組みになっているんです」

水島「そうですね」

矢野「だから、日本自身が主体的にやらないと、このアメリカの支援も受けられないし、日本の領域、主権も勿論守れないという状況に、今は日本人が知らない間に、既に立たされているんですよ。その中で、例えば防衛費の比率を倍増して、防衛費を今後、2027年迄に増やしますよというコミットメントで今、やっているんですけども、これについても、今のウクライナと同じで米軍が地上兵力を送ることは、もう期待できないです」

水島「無いですね」

矢野「その中で、日本には武器は送ってやるよと、情報はくれるよと、訓練チームもやりまよと。だけど兵隊は来ませんよと」

水島「ウクライナと同じですね」

矢野「海空軍が居たって一時的なもので、まずはミサイル戦ですというような前提の戦略に移行しているんですよ」

水島「そうですね」

矢野「日本人は、そういうことを知らなくて、今言った様なアメリカ恐怖症に未だに囚われていると。だから早く目覚めないと、日本の将来は危ういと。独立主権は守れないと」

水島「ただ、ちょっと、ひとつだけ異論というか言わせて貰うと、昭和天皇がアメリカ恐怖症になっていたというのは正確ではないと思います」

矢野「いや、恐怖症っていう意味じゃないですよ」

水島「いやいや、つまりね、アメリカと戦いたくないというね…」

矢野「あのねえ…」

水島「そこ、ちょっと誤解があると困るんでね」

矢野「はい、はい。ちょっと言わせて戴くと、折本さんの話もありますけど、幕末の時に、日本の尊王攘夷の精神は何だったかと言うと神州、日本ですよ。神の国、神州、日本を醜異と言っていますけど、醜い、異人ですね」

水島「うん」

矢野「外国人に踏ましめるなど。その聖なる神州、日本を穢れた異人に踏ましめるなどということが根本精神な訳です。それが国学の国体護持の一番、根本だったので、それは戦後に於いても全く一緒だったと思うんですね。だけど、それはもう排除出来ないから、物理的に武力が無くて排除できないから、それだったら逆に同盟関係を結んで攻められないように、仕組んでしまうと。そういう風に発想を切り替えられたという風に思っています」

水島「だから国体というね」

矢野「国体論ですよ」

水島「国体論の問題とその具体的な安保条約とね、この問題と、ごっちゃにしちゃうとね、つまり、そういう意味で、今、言った国体意識を持っているのと、もう一つ、一番大事なものは、まず昭和天皇の開戦と終戦の詔勅って言われるね」

矢野「はい」

水島「これを見た時、一番大事なものは、やっぱり国体の成果を発揮せよというね、こういう問題であって、今言った様にその精神なんです。それと、もう一つ、私が一番よく使うのは、人間宣言を強制された時に言ったのは『ハサミで煙は切れない』と。これはある学者が言ったのを言った訳だ。我々の国の国体の現実の問題、イデオロギーというよりも在り方そのものでね。煙って言うとおかしいけど、あって無いようなものだけでも厳然としてあるというね、その煙をハサミでは切れませんよと。いくらGHQがやってもね、というような意識であって、昭和天皇の意識はそういう意識で、あまり勝手に忖度は出来ないけども…」

矢野「おっしゃる通りですよ。私は別に否定していません」

水島「だから、そういうところから、あまりアメリカとも戦わないように、安保条約を結ぶという意識で、まあ、政治家は、吉田とか、それはおっしゃる通りだったかも分かんないけど、そこは少し分けておいた方がいいんじゃないかと…」

矢野「いや、天皇陛下の思っておられることは、もっと幅の広い話です」

水島「うん。そうなっていますよ」

矢野「今、言われたようなことが根本です。それは特に国の宝である国民を、これ以上、むやみに殺してはいけないという、その思いを…」

水島「全く、おっしゃる通りですね。エルドリッチさん、すみません、どうぞ」

エルドリッチ「はい。有難うございます。矢野先生の御発言で、吉田茂の話が出ていたので、矢野さんがおっしゃっていた国際情勢が、日米安保が出来た時と今日を比べたら、もう明らかに変わっています。吉田茂が色々批判されているんですけども、彼が1964年、既に引退している時期ですけども、実は、彼が、藤井先生の京都大学の高坂正堯さんと一緒に『世界と日本』という本を出されて、その中で、日本は国力に応じて、再軍備とか国際安全保障に於ける役割を果たすべきということを書いている。で、それが凄く重要な事だと思っています。つまり日本の経済力とか、日本の情勢が変化すると共に日本がそれなりに、より大きな貢献をする。

多分、彼が言おうとしたのは、日米の間では、より対等な関係を作る。或いは、それを突破して国際社会に於ける、より大きな安全保障上の役割も果たすというビジョンを多分、持っていた。そういう風に思っています。

そして矢野先生の発言の中に、尖閣の問題がありました。第5条は発動しない可能性があるけれども、私も、それを非常に心配している。これが、日米同盟の解消論の4つの内の一つのシナリオだなあという風に思っています。あとで、それを詳しく述べたいと思います」

水島「さっき言った尖閣の問題で言うと、今日、丁度、取り上げたんですけども、台湾がやる可能性があるんですよ。尖閣諸島の領有を台湾が主張しているんですよ。それを踏まえて中共、中国はね、自分のものだと言っているんでね。ということは、中国の共産党が一番考えるのは、台湾にやらせると。台湾に占領させると。それ、どうしますか。アメリカも日本もね、間を引き裂くってというのが一番の狙いだから、一挙両得でね、こういう風に狡く考えるっていうね。

だから、今、言った様に日本の安保条約の適用、実効支配していなければ、尖閣諸島をやらないうっていうこと自体も割と考えられる。私は、具体的にウクライナ、イスラエルを見ていれば、やったもん勝ちになっちゃうから手を汚さないやり方をするっていうことを指摘しておかなきゃいけないと。はい、どうぞ」

藤井「今の矢野先生の御発言から出て、アメリカが何処まで信用できるか。実はできないと」

水島「うん」

藤井「中国も非常に脅威がある。そういう議論の中で、今、日米安保条約が絶対であるという信仰を砕くにあたって、アメリカってというのはそれ程、頼りにならないんだと。安保条約をよく見てみると。中国の状況を見てみる。これ、凄く重要な視点で、ちゃんと現実を知る為に主張すべきだと思うんですね。

その一方で、僕がもう一つ思うのは、その議論を当然、やらないといけないんですけども、独立するっていうのは何かっていうことを改めて考える必要があって、大企業で、グーグルか何かの会社があって、日本の企業があったとして、G A F Aか何処かの企業に買収されるかどうかという議論をしている時にね、これは買収された方が得策かなあと、その方が我々の持っている技術とか社員とかも生き残れるかなということ、売却するっていう判断はあり得ると思いますよ。

だけど、ずうっと70年ぐらい、70年、80年やってきたら何か作りたいことも全然できへんし、社員もえらい搾取されてくるし、独立せなあかんって議論があったとしましょうよ」

水島「うん」

藤井「その時に、G A F Aの何か大企業から独立するかどうかってことをやる時に、やっぱり、ここは独立しましょうという時の判断に絶対に必要なのは、我々は滅んでもいいという覚悟ですよ」

水島「うん」

藤井「独立というものは、滅びるということ意識する事でもある訳です。それは、もう、大企業だから、ちょっと解り難くなりましたけど、まあ、何処かのコンサルタントの人が、一人で独立するでえっていう時には、やりたいことをやるけれども…」

水島「うん、うん」

藤井「その代わりリスクとして滅びる可能性もあって、滅びるんだったら滅びてもいいと。それよりも我が人生、会社人生という価値あるものの、価値ある人生、価値ある仕事をする為に独立をすることが絶対に必要なんだということで行く訳ですよ。従って、こっちにつ

いていたら得やという議論でそこにおいて、こいつ頼りないから独立しようとかやったら、結局、また中国や大企業の所に入れてえ～みたいなことになってしまっ、ずう～と、妄政治とオカマ外交をずうと続けることになるので（苦笑）」

モーガン「オカマ外交」

一同「（苦笑）」

藤井「アメリカが頼りないということを理解することも必要だけど、もう一つ日本人が絶対理解すべきは、独立をするということは滅びを常に意識する事で、いいんです、滅んだって、どうせ地球だってね、人類は50億年後には太陽に呑み込まれるんですよ」

水島「（笑）」

藤井「もう50億年の間に赤色矮星になって、50億年なんぼ国体を続けても、50億年後には絶対滅びるんだから、それが50億年後なのか10年後なのかの違いであって、いつかは滅びるんだから、その滅びるまでの間に精一杯、立派な活躍、国家を創るというのが独立の気概であるっていうのを忘れると、この今日の議論は出来なくなるという風に思いますね」

水島「いや、それは禅の言葉で言うと『大死一番』って言うんですね」

藤井「ああ～」

水島「何事も、そういう覚悟でやらなきゃっていうね」

藤井「うん」

水島「おっしゃるように、本当に損得でやってね、勝つからやるとか、負けるからやめるって言ったら、何事も本当に大事なものは捨てなきゃいけないですよ」

藤井「うん」

水島「見えないものですけどね。それを失わなければっていう感じですけど。山中さんは、今の議論、どうですか」

山中「ええ。大きな視点でアメリカっていうことを、ちょっと言いたいんですけどね」

水島「はい」

山中「僕が最近、アメリカでフォローしている元軍人とか元CIAの分析官の方々とかが居て、最近よく出ているのが、よくアメリカ人は、アメリカを共和国、リパブリックっていう言い方をするんですね。自分達の国のことを、所謂、王政ではないということで、それは本来そうであって、アメリカ合衆国は民主主義のリパブリックであった。その共和国では既に今、無くなってきてしまっ、アメリカ帝国になり下がってしまった。つまり、この国というのは、一般の人々から選ばれた代議員、その人達を中心になって上院下院で国の連邦政府が動かしているということが本来であるんだけど、現実を見ると、全然、そうっていない。

よく言われる、このバイデンさん、この間も惨憺たる姿をディベートで見せましたけど、もうどうでもシャッポはいいんだみたいな、彼がどうあろうと、実質的にあの国を動かしているのは、彼らの考え、私も非常に同調するんですが、結局、やはり一番、今、力を持っている

るのは大統領選挙にしても議員に対しても、ドナーと言われる、つまり資金提供者達なんですね。巨額の資金を持っている人達が介入してきて、両方、民主党、共和党に金を出しますから、この彼らと、あともう一つ、選挙によって選ばれていない官僚組織ですよ

水島「うん」

山中「この二つがしっかりと組み合わさって、議員達は駒のように、こっちからぽんぽんとお金が入って来るのを…、だから誰もアメリカ国民の事を考えて政治をやっていないと。それが今、アメリカ帝国は、僕は『アメリカと共に沈む日本』というタイトルで本を書きましたけどね、沈むって言ったらあれなんだけど、彼らが言ったようにアメリカは死にゆく、Dying 死にゆく帝国であると。こういうとこまで行っているし、それに全然、気づいていないのが日本であるし、まず日本のマスコミが全然、報道しないし、そして、やはり日本で、政治家もそうだけど中核で外交やっているのは、やっぱり外務省。私もお会いしましたが、やはり基本的に全部、アメリカ、ははあ～なんですね。それも民主党ですよ

水島「うん」

山中「これ、僕は、非常に怖い、偏った形での外交がずうっと続けられていて、2016年もトランプさんが大統領になっちゃったっていう時に、まるっきりパイプも伝手も無い。これと同じことが今回もトランプが、かなり勝つ確率が今、増えちゃっているものを、ほぼ、多分、今のあの感じだと、外務省はパイプがまた無くて。だから、いつも日本のメディアは、トランプがああしたこうしたっていうんだけど、トランプの周り、今、かなり色んなヘリテージ財団とか相当な老舗の政策立案チーム、政権移行チームがしっかりくっついて、やっている訳ですよ

そういうところを何にも見ないで、ただトランプがああした、こうしたってエキセントリックなところだけを報道しているということによって、一般の人々、日本人が、いつも間違っただけですよ。アメリカが今、どうなっているとか、世界の動きを日本のマスコミだけを通して見ると、まるで分らないっていう、僕はね、これに物凄く危機感を覚えたんですよ

水島「うん」

山中「2016年からそうですけど、その時から、そういう本を書いたんですよ。まあ、そういうことでもって、我々が考えているアメリカは今、もう、かつての数十年前、或いは戦後、もう本当にGDP、世界の45%を持っていたような頃とは違って、ただ、その中で現実的には未だに、日本一国だけが米国債を圧倒的に突出して持っているんですよ

水島「うん」

山中「チャイナが今、ぐう～って下げちゃってしまっていて、サウジアラビアなんか、もう5位にも10位にも入っていないんです。昔、この3つの国で米国債を大量に保有していた、そして、今の日本は売る事さえできない。あと二つの国はどんどん売っていますよ

水島「うん」

山中「大量に金を買っている」

水島「うん」

山中「だから、そういう中で、まあ、米国債、これね、とにかくアメリカは、ただで刷れる

訳だから（笑）もうね、我々はそれを買わされている」

水島「うん」

山中「そして、それを売ることも出来ない。でも、現実はそのじゃなくて、どんどん大きく動いている。やっぱりブリックス中心にグローバルサウス中心に、どんどん加盟国が増えて、彼らが彼らの紙幣、所謂、通貨を準備している中で、大きく地政学的にも世界が動いているっていう中で、我々は日本の立場を捉えて、はっきりと、それを日本の主権や、日本の国益をね、主張できる政治、そういうところには、政党、政治家が出てきて、そういうところが、しっかりと日本の国民の国益を代弁していかなきゃいけないんだという風に考えています」

水島「今、言った様に、この具体論で言うと、そういうことまで、ちゃんと想定してやらなきゃいけないんですけども、もう一つは、やっぱり我々の国の在り方が、考え方ですけどね、戦後の在り方自体が、やっぱり文化的に、我々、さっき、ちょっと言ったけど、幼くて子供みたいな状態だと、マッカーサーが小学校4年だとか言ったけどね、猿の惑星とかそういうような形の捉えられ方をしているって、でも本当にそうなのかと。

我々、日本の歴史や文学を少し勉強すれば、これは全然、そんなことないですよ。我々の国は、かなり優れた伝統や文化を持ってきたし、戦後は別としてね。戦後は、もう伊藤貫さんが言うように『世界で一番、臆病で卑怯な民族に成り果てた』というのは、あんた、言ってくれるなあっていう気はするけど、それは、あながち否定できないというね、こういう状態ですけども、今、言ったようにその問題で言うと、やっぱり、米国のレベルに合わせるって言うと、米国が駄目になると、山中さんがおっしゃるように、一緒に沈んでいくっていう。

ヨーロッパ自体も今、なぜこの極右と言われる人達が増えているかって言ったら、もう、500年の近代文明の事態の破綻というのを、キリスト教とかそういうものが破綻している。それで、この間もちょっと指摘しましたけども、ロシアには、ルネッサンスも宗教改革も無かったって、そのままツァーリの圧政があって、その中で文学に全部、ぶち込まなきゃいけないからドストエフスキーとか、ああいうのが生まれたっていうね。

これは小林秀雄の、いつも私が最近使うんだけど、そういうようなものが、実は、我々の中にあつたにも拘らず、GHQの見事な3S政策とか War Guilt Information Program とかね、こういう中で、日本人がさっき言った『俘虜記』の世界に、みんな、浮かれた。ただ、その中で、やっぱり我々が、いつも思わなきゃいけないのは二百数十万柱の英霊が大東亜戦争で国の為に命を捧げておられるっていう、その死体の上、遺体の上で、そんな飲み食い踊っていいのかというね、こういう痛切な思いも無きゃいけないっていうかね、過去は断ち切られたんですよ。

だから、それは本来、我々が今でも浅草、明治神宮、御大師様と色んな所へ行って伊勢神宮、何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさっていうのを庶民のレベルでも未だ感じているので、そこから、きちっとやれば、もう一回、日本の心というものを取り戻せたら別に敵対する問題じゃなくて、それこそ八紘一宇の精神は世界中に広まる事が出来る。

もう一つ、皆さんに、ちょっと聞きたいのはね、私はインドっていうのは色々欠点は沢山、あるから、物凄くあるけど、今、言った様に核武装して、世界で人口が一番多くて、で、色々な矛盾を物凄く抱えているけども、核武装しながら侵略国って言われてないんですよ。それで政治的にも何処からも、まあ影響はロシアや色んなものを受けているけれども、それなりに独立を保っている。

つまり我々が本来、戦後やらなきゃいけなかったことはインドのような形、私は核武装論者ですから、核武装っていうことを具体的に考えて、そして他国ともそういう形の関係を保っていく。まあ、パキスタンとチャンバラやっているじゃないかとかあるけれども、そういう意味で言うと、アジアで、皆さん、どうですか、将来的なことも含めて、お話を伺いたいんだけど、アジアでインドとかと一緒に色んな形で、別の秩序をグローバルサウスっていうのは未だ政治的なものが出ていないですから、こういうことを考えたらどうなのかなっていう気もしているんですけどね。

困難は沢山、ありますよ。よく言われる国連の敵国条項があるから、いつでもやられるから、こんなものやれないんだとか、この臆病者って言いたいんだけど、やる気があれば出来るっていう気がするんですけど、はい、モーガンさん、どうぞ、今、何か…」

モーガン「今、おっしゃった通りだと思います。先程、エルドリッチ先生がおっしゃったように誠意をもって日米間で交渉するとか、そのような御発言があったかと思うんですけども、私の意見は違います。誠意をもって交渉しないで欲しい。核兵器を持って交渉して戴きたい。アメリカを騙して裏切って、誠意をもって交渉しない方がいいと思いますよ」

水島「うん」

モーガン「敵です。完全に敵です。敵に対して誠意を表せば、それはご自分が馬鹿ですよ」

藤井「(笑)」

モーガン「誠意をもって交渉するって、エルドリッチさんは人がいいということで、とても良い御発言だなあとと思いますが、南部の立場から考えれば…」

水島「(笑)」

モーガン「ヤンキーを騙して、あいつらを出来る限り追い出そうっていうのが我々の立場で、誠意をもって交渉しないで戴きたい。もし、やろうとすれば核兵器を持って、インドとか色んな国と関係を築くことが出来るんじゃないですか。国連も恐れる必要が無いと思いますよ。あの国連を乗っ取って国連の中から色んな革命を起こすとか、国連は、ただの場所で、国連の中でもゲリラ戦争が出来ると思いますよ」

水島「うん」

モーガン「やろうとすれば、ヤンキーを上回って腹黒くやれば、出来ないことは無いんですよ。でも核兵器を持っていないと何も始まらないので、私は核兵器を持って交渉しましょうと、言いたいです」

水島「なるほど」

モーガン「エルドリッチさん、ごめんなさい」

エルドリッチ「(笑)」

一同「(笑)」

モーガン「とても良い御発言だったのに、ごめんなさい。台無しにしました」

水島「はい。またエルドリッチさんからも、お話を伺いたいけど、その前に、折本さんは、

いかがですか」

折本「そうですね、私も外交交渉は、もう誠意の通用しない世界だなと思いますので、そこは、やはり、あくまでも戦略的な駆け引きの世界だと思います。やっぱり、モーガン先生がおっしゃるように、軍事的な独立があって初めて外交交渉が成り立つ訳でありまして、その点、インドも核武装しましたけども、その時は確かそういう経済制裁を受けていますし、その時のインド人民党の指導者も恐らくアメリカの入国禁止措置とか受けていると思うんですね。制裁を受けていると思います」

水島「うん、うん」

折本「ただ、やはり独立国というのは、そういう制裁を受けて一時的に国際的な孤立をしても、自国の草の根を食んでも核武装するんだっていうことをパキスタンのカーン博士が言いましたね。あれくらいの覚悟を持ってやらなければ、一旦、それで日経平均が下がったから、それで支持率が低下して内閣が持たないような、そんな脆弱な政治基盤では、軍事的な自立は、とても成し遂げられないという風に思います」

水島「うん」

折本「やはりチャイナの台頭というのも結局は、あの文化大革命の時、1964年に核武装を断行した訳です。それこそ数千万人の餓死者が出た訳ですけども」

水島「そう」

折本「しかし、一旦、それで核を持ってしまうと誰も手出し出来ない訳ですから、それは、北朝鮮だって同じだと思います」

水島「うん」

折本「我々がいくら馬鹿にしても、最早、核を持った北朝鮮には、アメリカといえども手は出せなくなってしまった訳ですよ」

水島「うん、うん」

折本「ですから、まずは核武装をして、政治的な独立の基盤を確立した後に、経済の改革、解放をやったということが、やはり今日のチャイナの一つの大きな台頭の原因だと。日本は、しかしながら順序を誤ってしまったと。まずは豊かになって、然る後に独立しようという思いがあったかもしれませんが、そんなことは土台、不可能な話でありまして、国際的に孤立してでも、一時的に貧困に陥っても、何としても、そういう外国勢力を駆逐して独立を確保して、然る後に、対等な立場で外交交渉をやって経済発展を図っていくという政策を執れなかったというのが長い目で見ると、今日の没落の原因になっているんだと、私は思いますね」

水島「藤井さんは、どうですか」

藤井「はい。この外交交渉をどうするかっていう時に勿論、当然ながら論理的に考えて、核武装なき国家に於いて合理的な交渉なんて全然出来るはずがない訳で、独立する為に出来ない訳です」

水島「うん」



藤井「そうしないといけない訳ですけど、一方で、同盟を結ぶ時には、元々狐とタヌキの化かし合いだと思いながらでも、やはり心を通じ合わせる、まあ、現場同士でも、そういう局面ってというのは必要であって、今の日本はどっちも出来ていないところがあって、妾外交ってというのは、何もしないってことですから、ただ単に媚びるだけであって、それでもどうにもならないから、やっぱり日本人には誇り高く、そして心を通じ合わせる誠実さの局面っていうものもあれば、今よりも、もう少し日米関係の交渉が前に進むだろうと思うところがありますね。

従って外交というものは、当然ながら二枚舌、三枚舌をちゃんと使いながら、というか大人の関係って常にそうですから、全く信用しなくても何処かで信用しているということが続けられるような大人の国になって貰いたいってというのが一つ。

それから核武装に関しては、先程、申し上げたように、独立するには滅びるという気持ちが無ければ無理だということに合意できれば、まあ理屈で言えば、合意できれば、ああ、じゃあ、多少、貧乏になっても核武装しましょうってことになる訳ですけど、その合意は全く執れない訳ですよ。吉田ドクトリンにしても、とにかく恥も外聞も無く守って貰うことが大事なんだと、もう「朽ちぬ鷹は」というものを、何か、はき違えて、とにかく、もう誇りなんかどうでもよくて、病院で行っても健康寿命を延ばそうとかじゃなくて、ただ単に管を突っ込んで寝たきり病院で寝たきりで取り敢えず生きていたら、それでいいんやみたいな話になってしまっていて、みんな、そうなってしまっていて…」

水島「うん」

藤井「そうになったら、もう殆ど国としての未来を考える Q. E. D. というか、もう終わっている、証明終わりと言うか、次の一手が打てないという状況になりますから、やはり生きる価値というものが、ちゃんとあるんだという当たり前の、まあ、文学論とまで言わないですけども、そういう思想的と言うか、この大敗から脱却するような活動を、文学なり映画なり何なりで、一方で続けておくってことは非常に必要だと思いますね。

それと同時に、今、折本さんがおっしゃったような議論っていうもの、正論をしっかりと語って行けば、その内、それが融合していくってことは、この活動を続ければ10年や20年ぐらいで達成できると、僕は思います」

水島「そうですね」

藤井「例えば、それこそ、先程、水島さんもおっしゃいましたけど、庶民の中には、まだまだ素敵で立派な暮らしなり風土なり風習なり価値観なりというものが残っていて、特に永田町と霞が関、特に自民党が腐っているだけの話であって、権力というものがクズ収集装置みたいなもので、何て言うか、こう蠅がいっぱいおる所で蜜を置いたみたいに、わあーっと、たかっているみたいなものになっている訳です」

山中「(笑)」

藤井「でも、この全体には、別に蠅じゃない蝶々もいれば稲や美しいものもあるのに、その永田町と霞が関に汚あ〜いものが、うっわあ〜っと集まっているだけであって、ここを何とか出来れば、この国はまだまだ何とかかなと思います」

水島「うん」

藤井「でも、ここがずうっと続くと、鯛は頭から腐っていきますから、全部、腐ることになりますので、一日も早くこれを続けないといけないと思いますね」

水島「そうですね。丁度、その話で言うと、さっき尖閣の話が出ましたけど、私が言っているのは核武装のことで、これは海の矢野さんが前にご出演された時におっしゃっていたことですけど、2兆円あると4隻の核武装した原子力潜水艦、そしてドック、2兆円で出来るって言うんですよ」

藤井「うんうん」

水島「4兆円だったら8隻。8兆円だったら16隻。ドックも含めて世界最高の原子力核武装艦隊が出来る。日本は5年で43兆円を使うって言っているんですよ。それをやるより、8兆円で手軽にやっちゃった方が、よっぽど効果がある。もっと言えば、それをやりますと言っただけで凄く抑止力効果がある」

藤井「そうですね」

水島「我々は、尖閣が取られるようだったら核武装しますと。それから、もう一つ具体的に言うと、これは素人考えに聞こえるようだけでも、別に核を搭載しない原子力潜水艦16隻体制。いつでもカチャンと発射装置が付いているものを造れば、別に搭載していなくても、いつでも出来るような状態になる。こういう具体的なことをやる勇氣、言える勇氣も無いんですよ。だから本当にトマホークみたいな50年前の中古品を400発、買うっていうだけの話でね、つまり軍産複合体にお金を払うだけのことですよ。

我々の国の防衛予算だから、そういうことで具体的に本当に、きちっと一步一步、口で言うのは、ただですから、もし、我が国の領土の一つも取られるようだったら、尖閣を取るなら核武装する。中国にちゃんと通告しておけばいいと思うんですよ。アメリカにも通告しておけばいい。口で言うだけですから、お金がかからないですよ。

それで、もっと言うと、潜水艦隊を創るっていうことだって、核装備はしていないけれども、いつでも発射装置は使えるというね、これをやっておくだけでも、大体5年かかるっていうから。最低でも5年かかるって言うから、本当は、今頃から言っておいてやればいい訳ですよ。そういう具体的なことを全く考えない。イメージが無いっていうのが問題だと思います。エルドリッチさん」

エルドリッチ「はい」

水島「今、色々な話が出ていますけど、先程、モーガンさんから、ちょっとお話があったけど、何か反論でもあれば、はい」

エルドリッチ「(笑)」

一同「(笑)」

エルドリッチ「えーとですね(笑)、また別の機会で激論したいと思います(笑)」

水島「なるほど。はい」

エルドリッチ「核武装に関しては、先程、水島社長が紹介して下さった私の編集した本があるんですけども、その中で、しっかり採り上げています。私が知っている限り、アメリカ

政府の元関係者、或いは、今後のトランプ政権に入る人物達は、日本の核武装を真正面から支持している」

水島「うん」

エルドリッチ「この本が、恐らく初めてだと思う。反対論の人達が多いと思うんですけども、これを支持している内容ですので、次のトランプ政権にも、そういう風に期待したいと思っています。彼が今から9年前、そういう発言もしていたので。やっぱり民主党政権では、あり得ないです。核の格差には、強く反対しているし、それが多分、日本の封じ込めの延長線でもあると思うんですけども、しかし、もしトランプになったら、こっそり秘密でやるより、公で出来るようになる」

水島「そうですね」

エルドリッチ「はい。そういう風に考えています」

水島「なるほどね。はい。時間になったので一回、休憩に入りますけど、例えばトランプが言っているのは、もし当選したら所得税を無くすと言っているんですよ。それを全部、関税で賄うって、つまり（笑）自分のところに来る物に全部、関税をかけるんだと。その関税で儲けた金で所得税ゼロをやるっていうね、でも、ちょっと極端だろうっていう言い方もあるけど本気でやるかも分かんないっていうのがトランプなんでね」

藤井「うん」

水島「これをやられたら、日本はどうするんだっていうねえ。全然、騒ぎにもなっていないですよ。本当にそうだったら大変ですよ。トランプは、このまま行けば、9.11みたいなこととかバイデンさんが辞めるとかね、ハリスさんが暗殺されるとか色んな事件を起こして、この大統領選挙が混乱状態になっていく可能性もあるし、ネタニヤフが暗殺されましたとかね、11月迄に色んな事が起こる可能性があるじゃないですか。だから分からないけれども、もし普通に行ったらトランプが当選しますよね。そうしたらトランプ大統領も本当に自分の最後の機会だと思っているだろうから、アメリカの為に何をやるかって言ったら、私は、そういうことを本当にやり兼ねないと思っているんですよ。そうなった時のことを財務省は何も考えていないでしょ（苦笑）」

藤井「特に岸田政権、岸田さんの事なんて言っても、本当にしょうがないですけど、今日、この議論でね」

水島「まあ、でも、一応、言って下さい（笑）」

藤井「でも、こういう議論に最も相応しくない人物ですよ」

水島「（笑）」

藤井「こういう議論から最も遠い内閣が出来ちゃいましたですね」

水島「そうですね」

藤井「吉田ドクトリン以降、ここまで、だから岸田内閣っていうのは、吉田さんの最終的な作品ですよ」

水島「そうだねえ。というようなことで、そういうのも含めて、後半は、具体的に、或いは、

近未来の問題として考えてみたいと思います。安保条約、アメリカというものと、我々は、どう付き合うかっていうのは、ずうっと根本的な戦後79年続いてきた問題で、我々の日本がどうあるべきかという姿を、我々は問わなきゃいけない問題だと思っています。一回、お休みします。はい」

一同「(礼)」

## <後半>

水島「はい、後半になりました。今日は『日米安保のなき世界』日本の可能性と言う形で、色々議論しています。これから大変な激動の時期が来ると思うのは11月のアメリカの大統領選ですね。その前後にも色んなことが起こりそうだというようなことでありまして、火種はウクライナ、そしてイスラエル。イスラエルでは、皆さんご存じのように、4万人近くのパレスチナ人が殺されているということですね、私は『ジェノサイド』と言ってもいいと思いますが、こういう状況の中で日本の言論界のなかでも、イスラエル寄りの人が居てもいいと思いますけども、あまりにも、こういった問題がメディアでも報道されていないということも本当に問題だと思っています。

正確な情報が伝わっていないっていうことは、やはり国民の判断を狂わせますから、そういう中で、私達が一般的に言えば突拍子もない『日米安保がない日』『米軍基地がない日本』ということイメージして、どういう形でつくれるんだということですね。前半は、こういうものに関する皆さんの意見を聴いて戴きました。

これからのことも含めて、これは出来るんじゃないか、あれが出来るんじゃないかっていうこともあると思いますので、皆さんの提言を伺ってみたいと思うんですけど。矢野さんから、お願いできますか」

矢野「これが出来るんじゃないかという可能性という点で言えば、私は、安全保障で核抑止力が専門で、元々核保有すべきだと。核を搭載するとすれば原潜でやるべきだという見解です。それは直ぐにでも政治的決定が出来ればやれるという風に思います」

水島「そうなんですよ」

矢野「ええ。それだけの潜在的な色んな技術とか財政力もありますし、国際的にも、多分、認知されると思うんですよ。アメリカも含めて」

水島「はい」

矢野「その辺りの決心が出来るか出来ないか、国民の支持があるか無いかっていうのが最終的な決め手になると思うんですが」

水島「そうですね」

矢野「もし、それが出来れば、日本が核を保有して国家の安全保障の根幹を他国に依存しないという体制に移行すれば、決してマイナスになるというよりは遥かにメリットの方が多い

と」

水島「うん」

矢野「それは何故かと言うと、今の多極化した世界の中で、日本というのは一種の有色人種と、それから白色人種と言うか、或いは非白人と白人の世界の繋ぎ目でもありますし、それから海洋国家と大陸国家の繋ぎ目でもありますし、先進国と途上国の繋ぎ目でもあるということで、その色んな意味合いで、日本が、ひとつの中核、多極化の時代の中でも、ひとつの仲介者としての立場、そういうポジションをとれる、そういう潜在的な位置にあると思うんです」

水島「うん」

矢野「ですから、核を保有して安全保障の根幹を、しっかり固めて国際的な信頼を得られれば、もっと外交も多角的に展開出来ますね」

水島「うん」

矢野「それから経済についても、今迄の従属的な経済じゃなくて、日本の富が無駄に国外に流出せずに国内で循環するようになると。そうすると、日本自身の経済の成長にも繋がりますし、国力の総合的な向上にも繋がると」

水島「はい」

矢野「そこで好循環が生まれると思うんですね。それと同時に、そういった国内の経済力を背景にして一種の富国強兵政策が実現しますから、これは第二の明治の文明開化と同じように、日本がもう一度、世界をリードする国になっていけるような、そういう上昇気流に乗れるという風に思います。

それを背景にすれば、多極化した世界の中で日本的な調和と共存を軸にした国際社会の在り方というものが見つかるんじゃないかと。日本が主導するというのは僭越かもしれないですけども、少なくとも一極として、そういう提言をして、世界に貢献できるような日本になっていくという風に思います」

水島「なるほどね」

矢野「それが日本自身の文化力、文明力として再生されて、また新しい次元に行くんじゃないか。そういう意味合いで、500年ぐらいの周期で解放の時代と、それから国風化の時代というのを繰り返してきたんですが、日本は明治以降の政府の追いつけ追い越せという時代が終わって、もっと内部の充実というか国風化の時代になって行って、その熟成した文化を外部に伝播していくというような時代に入っていくと思います」

水島「はい」

矢野「その転換点が今であって、その一番の根本は、やはり、いかに自立した安全保障能力を持つかということだと思いますね」

水島「はい。なるほどね。これは今、最後に言ってくれましたけど、我々は大体、明治時代以降、脱亜入欧というね、そういう流れみたいな形で近代化ということをやってきたんだけど、果たして、この時代はそうなのか、もっと言えば脱欧米入日と言うかね、そういうよう

なことを考えなきゃいけない時代が、今、おっしまったような形で見直す時期が来ているんじゃないかっていう気はしますけどもね。じゃあ、山中さん、お願いします」

山中「ええ。皆さんのおっしまった、所謂、日本の核武装」

水島「うん」

山中「これが戦後は、もう、ずっとタブーと言うか、或いは、そういうことは今でも、多分、表の主要メディアもテレビなんかでは…」

水島「言いませんね」

山中「言えない」

水島「はい」

山中「言ってしまったら、もう、間違いなく、その人は次からテレビでは呼ばれない。だから、そんなことなんか、まるで言わない、まあソフトに、ただただ、よいしょ、よいしょっていうかね、アメリカさんと宜しくと。こういう人だけが今、テレビに出ていると」

水島「はい」

山中「こういうことの流れの中で、今、戦後一貫して、特に日本の外交という問題に関して話をすると、僕は、ずっとアメリカへ長く行っていますが、アメリカから日本を見るっていうことになると、まあ、往復が多いものですから、そういう中で両方の中を見て、いつも奇異に思っていたことが、まず、日本のメディアでも、或いは政府でも、最初に国際協調という言葉が出て来るんですよ」

水島「うんうん」

山中「まず国際協調が大事だと。国際協調が先にありきで、だから何処へ行っても国際協調、国際協調って、みんなが善い事を言うものだから、メディアも持ち上げて、そして政治家も、私達は国際協調で行くんですと。首相達が今迄、各国を訪れてどンドン金をばら撒いていく訳ですね。だけど、よく考えてみた時に、この国際協調の前に、本来であれば、まず最初に日本にじゃないですかという議論が、何故、出て来ないのかなと…」

水島「そうですね」

山中「そういうことを、ずうっと不思議に思っていて、そして、それを言っている人は数少なく居るんですが、僕は、ひとつの処方箋じゃないけど、これは望みがあるなあと思いましたのは、ついこの間、例のパンデミック条約の、水島社長もそうですが、林千勝さん、及川さん達が中心になって、最初の4月、私は行きましたけど、1.9万人が集まる大きな集りが突然、出来た。

それで5月末には4万人から5万人を超えと言われる、ああいう普通の一般人ですよ。今迄のように、そういう動員がかけられた訳ではない」

水島「うん」

山中「組織でも組合でも何でも無い人達が、あれだけ集まって自分達の声を挙げたと。で、これらが何故かと言うと、つまりWHOという超国家機関、各国の国の上にあって、彼らが

決めたパンデミックに関しては、どんなお注射でも受け入れろということが、あの条約の中に二つ程、ある訳ですが、それが押し付けられるとなった時に、あの我々が2020年から体験した親の死に目にも会うことが出来ない。病院に行っても施設に行っても…」

水島「このへん、ちょっと気をつけておいて下さいね」

山中「はい、はい。分かりました。例えばね（笑）」

水島「色々、ちょっとありますからね（笑）」

山中「そういうことも起きた」

水島「はい」

山中「みんなは、その体験をしている訳ですよ」

水島「はい」

山中「これ程、理不尽なことが起きて、そして、その政策というのはアメリカのCDCから、あのトップのファウチっていう人から悉く、それが間違っていたということが今、どんどん現れて来て…」

水島「ファウチが認めましたね」

山中「はい。認めました」

水島「所謂、距離をとれとか、マスクをつけろっていうのはね…」

山中「はい。いや、そのことを、よく覚えてないなあなんて言っちゃってね。酷い話ですよ。でも彼は、議会でガンガンに、ずうっと、あのランドポール議員とかに追い詰められてやってきたけど、何回も何回も嘘をついて逃れて来た。だけど、そういうこともどんどん判ってきちゃって、それに気づいている日本人の数が出来た。

そして、彼らは、このまま、いつまでもWHOというような、いい加減な組織が物凄くお金を色んなところから集めて、或いは、製薬会社からも多額の金が入っていると、基本的に国連というのは、こういうところになっちゃっている。或いはWHO、或いはEUとか、こういう超国家機関っていうものの本質を、大勢の日本人達が解り始めたということが、起爆剤になって、まずは、国連とか言うとな、日本は今迄、はっはあ〜の世界で来た訳ですよ。国連と言うだけで何か有難いと。絶対、間違っていないんだということが、全然そんなことは無いっていうことを理解して来た。僕は、これが凄く大事なことで…」

水島「そうですねえ」

山中「トランプが2016年に出た時、まず、WHOから自分は撤退するよと、金は、もう引くんだよと。あれを聞いた日本人の人は何て思ったかと言うと、えっ、とんでもないと。とんでもない男が出来たと、みんなが思った訳ですが、実際、何年か経って彼が言ったことが正しかった。この2024年、彼が勝った時には、もう既に言っていますよね」

水島「うん」

山中「資金を引き揚げる。WHOから撤退する。パリ条約も同じように撤退する。だから、こういうことがヨーロッパでも、あれだけ極右と言われるところがどんどん増えてくると。

世界でそういうところが増えて来る中で、日本も今迄と同じ国際貢献、国際貢献、国際協調ということの有難がってやっていたことが、一般人の中から、かなり意識が変わって来た」

水島「うん」

山中「日本は自立して、日本で、日本自身が国を守らなきゃいけないという人達が明らかに増えているという気がします。私の感覚ですけどね」

水島「うん」

山中「一気に増えている訳じゃない。マスコミは、まだ完全に抑えていますからね」

水島「うん」

山中「それを叩く方なのでね。だけども、あのウクライナを見た。僕は、あれも非常に大きいと思うんですよ。私を書いたこの本で『今のウクライナは明日の日本』というのが第二章ですがね、これは本当に冗談じゃなくて…」

水島「その通りですね」

山中「それも考えていて、両方に共通するのは、両方共、自分達で自分の国を守る力が無いということですから、他国に安全保障を依存しているっていうのが、この二つの共通点なんですね。我々も全く同じようにやっている。つまり自ら自分の力で自分を守れないものは、国も守れない。私は15歳から空手を長くやっていますけど、その大師匠にあたる方が、まず男は自分の身を守れなきゃいけないと」

水島「うん」

山中「自分の身を守れて初めて家族を守ることが出来ると。家族を守れる人が初めて周りの仲間を守ることが出来る。そういう人が国を守れるんだとおっしゃいました。空手の後輩で実際来たんですけどね、どっちかと言えば、傷害でもないんだけど、学校で問題ありましてね。落ちこぼれの生徒で、一回、彼に聞いたことがあるんですよ。お前は将来、何をやりたいのって聞いた時に、アフリカの貧しい子供達を助けたいんですよという訳ですよ」

水島「(笑)」

山中「お前ね、自分で自分の面倒も見られない人が、何故、アフリカの貧しい人達を助けたいのかと。でも、はっきり言えば、今の日本なんてそんなもんでしょ。自分の国さえ守れない人が何で他国へ行って、一番、遠い所で戦争をしているウクライナに1.8兆円も出させられて、戦後の復興会議。戦争も終わっていないのに、この1月、2月ですか、日本であの復興会議をやらされた。一番、遠い所にある日本で、ですよ」

水島「うん」

山中「こういったことにさえ、おかしいんじゃないですかと言う政治家が居ないって、その方がおかしいんじゃないかと私は思うんですよ」

水島「うん」

山中「ええ、ですから、どちらかに光があるとしたら、もう今の政治家や自民党だって既存の政党に頼っていても、まるで全くどうにもない。これはモーガンさんと全く同じですが、



やはり普通の一般の人々が草莽じゃないけど、こういう人々が、立ち上がって来る以外に無いんじゃないかっていうのが、私の考えなんですよ」

水島「そうですね。はい。やっぱり、その問題は問われている問題で、我々は明後日から、また広島へ行きますけど『岸田落選運動』っていうのをやっているんですけど、あそこは50万人ぐらい有権者が居るんですね。そうすると小選挙区だから50万人が決断してくれて、25万人の過半数が、岸田は駄目だって言ったら総理を替えられる。自民党の腰抜け議員が何も出来なかったのが、あつと言う間に替えられる。そういう手法を編み出したというか、武見でも河野でも何でも、小選挙区って有権者が当選させるのは難しいじゃないですか。金もそうですが一人しか出ないから。

だけど、その一人だったら落とす事が出来る。影響が凄く大きいと思いますね。だから実績を何とか次の選挙で作りたいと思ってまして、今、山中さんがおっしゃったように、これを草の根の国民にも出来る事っていうね。現在の法律しか認められないから、やれることは何かっていうのを現実にと考えると、もし、岸田が落選したら、日本の政治史上、初めてになるんですね。私は先週も広島で落選運動をしてきたんですけど、やっぱり、はっきり言って、多分、全員に聞いた訳じゃないけども、広島市民もあまり好きじゃない、あんまりっていうか、かなり嫌いじゃないかってね。岸田はいいよっていう人は本当に居なかったという気がしましたね。

ただ、こういう選挙区とか自民党と戦後の体制そのものが、ああいう人を生み出して、そのまま続けて対抗馬も殆ど居なかったんですよ。だから、もう楽々当選したけど、もう次は、そうはいかないぞっていう状態が出来る。こういう具体的なやり方も、山中さんが今、おっしゃったように草の根しか今、居ないんでね。やっぱり、そういう気がしますね、おっしゃるようにね。はい。有難うございます。では、藤井さん、お願いします」

藤井「はい。前半のお話、今のお話、もう全てそうなんですけども、今、住んでいる戦後日本という空間は本当に倫理的、道徳的に考えて極めて恥ずべき、おぞましき状況であって、自分の身を自分で守れないにも拘らず、アメリカ様に頼って守って貰える。でも実は、よく考えると守ってくれないんだけど、守って貰えるというかのようにして生きていて、それぞれ、自分が今だけ、金だけ、自分だけのことを考えて誇りも何も無く生きている。

その正に捕虜収容所のような状況が戦後、日本におかれていて、この今日の『日米安保なき世界の可能性』ここで議論しているというのは、そこから脱却して、本当に誇りある国家に生き、誇りある人生を日本人一人一人が生きていける状況をつくるには、どうしたらいいかということを考えている訳ですが、考えれば考える程、難しい状況で、僕自身、この問題を、まあ、子供の頃からと言ってもいいでしょうし、特に、西部邁の塾に入ってから、より一層、そういうことを、ずっと何十年も考えてきた中で暫定的に、僕が考えている最善の次の一歩、だから巨大な囲碁、長い囲碁、長い将棋を打って、どうにかして、この、ほぼほぼ敗北しかかっている状況からの勝利、独立を勝ち取るという状況をとったらいいかっていうことを考えている中、僕の戦略論は、やはり第一歩はデフレ脱却だと思っているんですね」

水島「そうだよね」

藤井「このデフレ脱却というのは、ただ単に金持ちになりたいっていう話ではなくて、謂わば、デフレというのは病であって、普通に生きていれば色々な事を、誇りだとか何だとか考えますけど、病になると健康な人間でも、ずう〜っと、この辺、痛かったりとかすると、もう段々

人間性が失われて痛い痛いだけになってきて、もう畜生化していくところが、どうしてもあると思うんですね」

水島「うん」

藤井「それがデフレという状況であって、別にお金持ちになりたい訳じゃなくて、このデフレというような異常な状況を脱却すること、これは即ち日本という国家が、今病んでいる、この20年、30年病んでいる、この病から脱却して初めて何か前向きなことが考えられる状況になる。そういう風に僕は感じています。

デフレであることでブラック化が進み、お金が無くなって、ト一横だとか何だとかって若い人達も希望が無くなって、色んな犯罪も起こって来るし、金持ちで、ちょっと賢かったら直ぐ医者になって、ぼろ儲けしてやろうとか思ったり、何か有名人になったら直ぐ権力を握って、それでパー券みたいなセコイ話もありますけども、何か自分の好きなようにやっていって、正に政治学で言うところの、所謂、中南米のバナナ共和国のような状況に今、なっている根源は、やっぱり、この貧乏になっていくという、もう希望の無さの問題であって、金持ちになるという水準ではなくて、未来に希望があると思わせる為にも、やはりマクロ経済で今年と来年の方が賃金があがって、来年よりも再来年の方が少し良くなっていって、それなりの安定的な将来があると思うからこそ、少し長期的なことを考えられるっていうことを日本人全員が考えられるような状況にしてあげたいと思っています」

水島「そうだねえ」

藤井「例えば卑近な例で申し上げますと『沈黙の艦隊』ですか。あれがNETFLEXで復活をして観ているんですけども、あそこに出て来る総理大臣も官房長官も中々立派で、まあまあ、話の内容は置いておいても、独立国、大和の原子力潜水艦があって、核ミサイルを持っているかもしれないという話で、それと日本国政府がそれを使って、独立を勝ち得ていくという物語を描いているんですけども、あれは1988年から1996年の漫画で、あの時代は、そういうことがあるかもしれないって、僕は大学生の時に見て思っていたんですけども、今、岸田文雄さんにあれが出来るかと言ったら10兆パーセント無いんですよ。

今、自民党に居る政治家の誰かが、そこにはまって立派なことが出来るかって言っても絶対に出来ない訳ですよ。更に日本の言論空間に影響を及ぼした『戦争論』、小林よしのりさんの戦争論がありましたけど、これも1998年です。

1998年そのものはデフレに入った最初の年でありましてですけども、未だバブルが崩壊したとは言え、気分としてはずっと成長していたところがあって、あの『戦争論』っていうものは、あの時、確かに多くの若者の心を掴んだと思うんですね」

水島「そうでしたね」

藤井「ですから、やはり、それなりに成長しているという状況が、やっぱり日本国民の若者を中心に何かを考えさせることがあって、或いは、60年とか70年の安宝っていうのは、確かに、あの頃は貧乏だったし、砂川闘争の時も確かに貧乏だったけど、少なくとも、今日よりは明日、明日よりは明後日と成長していって、将来はそんなに暗くないという見込みがあって、若者は、ああいう倫理、道徳、政治運動に参画していったと思うんですね。

ですから、僕は、このデフレ脱却を、是非、まず第一歩にやって、それから、我々は、このデフレの状況下でも、こういう議論は、ずっと続けておくんだけど、この議論の影響範囲と

いうものはデフレの状況よりも成長している状況の方が浸透するのではないかと、僕は感じています」

水島「それはありますね」

藤井「それは、デフレっていうのは不況ですけども、不況っていうのは英語で depression ですから depression っていうのはうつ病っていうことでもありますから、実はマクロ経済現象っていうのは一人一人の人間のミクロの精神、うつ病と同時相即で、コインの裏と表としてあると思うので、僕は、お金持ちになる為と言うよりも人間の精神のうつ病状況、日本人の希望の無いうつ病状況を解消する為にもデフレ脱却が必要であるという風に思っていて、それで、僕は相当、デフレ脱却論っていうものをやっていたし、アベノミクスなるものとも参画したし、安倍さんとも、そういう非常に広い意味で戦後レジームからの脱却っていうのは正にこの議論ですから、戦後レジームからの脱却をする為にも、まず、デフレ脱却が必要だという、そのストーリーを、僕は今、やろうと思っていますし、デフレ脱却しなくても、ちゃんと核武装が出来るような議論が成立すればいいんですけど、多分、そんなことしているよりも、もっと明日のパンとかの話になってしまっているんだと僕は思います。

そして、更にマクロなことを言うと、やっぱり富国強兵というものは、富国が無ければ強兵も出来ない訳であって、結局、北朝鮮も必死で経済成長もやっているし、プーチンだって、今、あれがいいか悪いかは別として、あれは、もう成長できたから、ああいう状況になっている訳で第二次大戦のドイツ、第一次大戦のドイツだって、あれがいいか悪いかは置いておいて、やっぱり成長してきたから、ああいう戦いというものがあった訳で、戦前の大日本帝国だってそうですから、そういう意味で考えてデフレがずっと続いている状況で核武装とか独立っていうのは相当、厳しいだろうと、僕は思っています」

水島「うん、なるほどね」

藤井「ただ、それは単なるデフレ脱却であれば、もうジュリアナ東京の道まっしぐらみたいな話になって、おお、いえ～いっ、楽しいぜえ～とかになってしまいますから、やっぱり、そうならないように、日本にお金を注入する時に、そのお金がちゃんと品位のある方向に流れる様にする為にも、こういう議論をしっかりと続けると同時に、文学論とか思想哲学論とか国体論とか、そういう風土論とかを、我々がしっかりと継続しておくということが、日本が再生できる道ではないかと思っていますし、勿論、こういう、今言った戦略論というものが成功する確率の方が、僕は残念ながら低いとは思いますが、然しながら、それ以外に良い手が思いつかないですから、僕は是非、それをやってみたいと思いますから、そういう意味で消費税の減税ですとか公共投資の拡大ということをやるとべきだと思いますし、自民党にやって戴けるんだったらそれでもいいんですけど、まあ、ちょっとしんどそうな気がしますから…」

水島「なるほどね」

藤井「う～ん。だから別に立憲民主党でも参政党でも何でも、まあ、共産党はちょっと、どうかと思いますけども、何処でもいいから、そういうことをやって貰いたいと思っていますね」

水島「今、少なくとも私なんかは思っているのは、その今の指摘で凄く大事な話でね、つまり希望を持つとか精神的な影響っていうのは、変なマルクス主義的な土台論とね、上部構造論じゃないけども…」

藤井「うんうん、うん」

水島「やっぱり相互浸透があると」

藤井「そうですね。上部構造、下部構造は循環がありますから」

水島「そう。だから、所謂、下部構造っていうのは今言ったデフレ脱却のね、一番大事なこと」

藤井「うん」

水島「それをやる時、脱却する為に、実は希望とか戦う気持ちが必要なんでね」

藤井「う～ん」

水島「やっぱり、それは上部構造としてもね」

藤井「そうですね、循環を」

水島「その相互浸透が、やっぱり、あってこそだと思うんでね」

藤井「うん。そうですね」

水島「私は両方共、大事だと思っているんですよ。ただ、そういう意味で言うと、本当に、そこで諦めちゃわれると困るんでね」

藤井「うん」

水島「今、丁度、ト一横って出たけど、あれは16～7歳、18歳ぐらいの子が、まあ、うちのキャスター達が取材に行きましたけども、1万5千円とか2万円ぐらいでね、売っている訳ですよ」

藤井「もう1万を切っているっていう話ですよ」

水島「うん。それでね、そのお金が何処へ行くかって言ったらホストクラブのホストに貢いでいる。つまり、まるで日本のお金を貢ぐ訳ですよ。評判になりましたよね、千何百万だか1億だか知らないけど、そういう日本の姿。身体を売って、心も売って、それでホストの寵愛を受けようとするっていうね。まあ、唯物的な生き方だけどね、ただ、哀れな我々の姿じゃないかっていうね、さっきの妾論、オカマ論ですけどね。だから今、本当に、デフレの脱却っていうのを、我々は戦い取るっていうことをやる為にも、実は岸田を倒すとか核武装とかね」

藤井「そうですね」

水島「こういう前向きな形で、俺達は出来るんだっていうのをね、でも本当に今言った様に、我々は、どんどん貧しくなっていますからね」

藤井「そうですね」

水島「はい。そこは本当に踏まえなきゃいけないことだと思いますね」

藤井「要するに核武装なんかしようと思うと、相当な士気が必要ですから、その士気を獲得する為にも一定程度の経済的な裏付け、経済的な希望っていうものを、国民に与える必要が

あるのではないかと思いますね」

水島「まあ、本当にねえ、そこのところは、また庶民論でね、どう思うかだけど、私は日頃、真面目に背広を着てコツコツと会社に通っているおっさんやお姉さんがね、いざとなれば、武器を手にとってくれて立ち上がるんじゃないかっていう期待はしているんですよ。子供を守る為だったら、この間、さっきちょっと言った4月13日とか5月31日、万単位の人達が何の損得も無く集まってきている。あれは命っていうのがあるんですよ。だから今、藤井さんが言った様に命懸けでね、子供は飢えてね」

藤井「うん」

水島「これから、そんな状態になる可能性だってあるから、そうなったら、もう許さんぞっていう形でね」

藤井「そうですねえ」

水島「イデオロギーを超えて、みんなで集まって立ち上がるということは、あり得ると思っているんでね、だから、そういう意味では、おっしゃるように、非常に命に関わる問題ですからね。このYouTube番組では中々言い難いんだけども（失笑）そういうことですよ」

藤井「もう、あれが象徴ですよ」

水島「ほんとに」

藤井「そう、あれって、ちょっと言えないでしょうけど（苦笑）」

水島「はい。ほんと、ふざけるなっていうねえ」

藤井「ほんと、そう」

水島「YouTubeがそうだけど、今、もう言っておきますけど、昨日、紹介しましたがニコニコ動画は未だ、あと一か月以上かかりそうですよ。つまり、あそこでは何でも言えたんですよ。だから我々はそっちで言っていた。それも、もう駄目になった。誠に言論空間というのが狭くなってきていますね。はい。じゃあ、モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。先程のニコニコ動画の話ですけれども、冒頭で申し上げた通りCIAがこの国の中でやり放題です。CIAがニコニコ動画をやったとか、証拠が全く無いんですけれども、CIA以外の誰かと考えられない状態で、日本国内では反スパイネットワークが必要だと思います」

水島「はい」

モーガン「まあ、アメリカであろうが、中国であろうが、色んな厭な人物が、この国の中でやっていると思いますので、あいつらを追い出す組織が必要だと思います。あと、折本先生がおっしゃったチャイナのお話ですけれども」

水島「はい」

モーガン「今、チャイナとの関係、チャイナをもう一度考え直すチャンスではないかと思っております。尖閣諸島が本当に大きな問題で、いつも言われているのは、日米同盟が中国に対する抑止だと言われているんですけれども、全く違うと思います。日米同盟が日本を抑止

しているし、尖閣諸島の問題を普通に考えれば、あの中国の船が最初に来た日、あいつらを撃沈すればよかったと思います。次の日に来れば又、撃沈。海の底に行かせることが普通で。でもアメリカ様が、それを許してくれないので撃沈しないで、逆に日米同盟が手枷足枷になっていて中国との関係はスッキリしない」

水島「うん」

モーガン「日本が独立すれば、中国は逆に日本を怖れる」

水島「うん」

モーガン「恐れて戴ければと思います。エマニュエル大使、総督府が、最近、中国に対する恐怖を煽っているじゃないですか。要は、日本人の行動力を麻痺させたいのかと思います」

水島「うん」

モーガン「エマニュエル総督府が日本の為に中国と対立しているじゃなくて、もっともっと依存して貰いたいから恐怖を煽っている。そういう人物ですよ。アメリカの思う壺にならないように、中国に対する対策、日本の国益を持った対策が必要じゃないかと思っています。で、アメリカの国債ですけれども、アメリカ国債を買うのは、もうやめて。この間、石田さんの越境3.0の番組に出演させて戴いて、その場で石田先生がおっしゃったことは大きいと思いました。岸田は東洋版ゼレンスキーだと、私が言っているんですけども、いやいや、岸田はゼレンスキーより下だよと石田さんがおっしゃって、何故かと言うとゼレンスキーがお金をくれと言うじゃないですか。日本人がお金を払う訳です」

水島「(笑)」

モーガン「お金を払う奴隷って、そんな話、ありますか」

水島「そりゃそうだね」

モーガン「だから、それはゼレンスキーの方がマシだねと」

一同「(笑)」

モーガン「そう言われれば、あいつが、お金をくれと言うんですけども、お金を払う奴隷、1円プラス奴隷って、それは美味し過ぎる。あいつらは甘い汁を飲んでいるなあと思いました」

水島「はい、その通りだねえ」

モーガン「ねえ」

山中「あだ名が銭くれ好き～(笑)」

モーガン「そう。そう、そうなんです、それね。そう(笑) 銭くれ好き一、銭だけ。本当にそうですね。本当にその通りだと思います。今日は7月4日、米国の誕生日だと言われていますが、それは違うんですよ。アメリカの誕生日は、初めて北アメリカ大陸の地面を踏んだ、その瞬間がアメリカの誕生日です。7月4日は、どういうことかって言うと、白人数人が、ただの紙屑にサインした日。白人がその紙屑にサインして独立したって言うんですけども、奴隷を持ちながら独立したと言って、奴隷を所有している人間が自由の為に、その紙の屑に

サインをしたって、その神話を信じるのを、もう、やめて戴きたい。アメリカっていう神話。

我々南部の人々は、そのワシントンが言う自由とかデモクラシーは本当に危ないことですので目覚めて戴きたいと思います。折本先生がおっしゃった、進化中とか Yellow Monkey とか、それこそがワシントンの考え方です。DNAですよ。このワシントンは日本を占領しているし、あのワシントンを早く裏切って戴きたいと思います。ワシントンを裏切る気持ちの良さ、楽しさを味わって戴きたい。もうスリリングですよ。心の中のアトラクションみたいな感じで、ああ、ワシントンを裏切った。それは楽しいよ。一緒に裏切って下さい」

水島「そうですね」

モーガン「ワシントンとかアメリカは、共和国と言われているんですけども、その共和国を壊さなければ、我々アメリカ人は自由にならない。あのワシントンは共和国という綺麗事を使って我々を奴隷化したんです。しています。私は独立したいんです。で、日本が独立しない限りアメリカは独立できないので、一緒にワシントンを裏切りましょう。

先程のベーコンの話ですけども、捕虜がベーコンを食っているという話。ワシントンそのものですよ。片手ではベーコン、コカ・コーラとかチョコレートを持って来て、片手ではジェノサイド。アメリカは、ずうっと、その繰り返しじゃないですか。ジェノサイドをやったあとでベーコンを渡す。ジェノサイドをやってから Give Me Chocolate じゃないですか。アメリカ人は、そのような、まあ、多分、心理的な構造じゃないかと思うんですが、アフリカの貧しい子供を救いたいということを、よく耳にする。

でもアメリカ人って、やったことの罪悪感、それを自分から隠す為にも博愛とかアフリカの子供を救いたいとか綺麗なことを言うんですけども、アメリカ人が持って来るのはジェノサイドとベーコンがセットですよ。セットメニュー。ベーコン・ジェノサイド・セット。いつも、その様なパターンで持って来る訳で、私は、この間、ある典型的な拝米保守と討論しました。あの方が活米とおっしゃっていました。

よく活米していると自慢話をされていて、私が反論したんですよ。日本人は活米していないですよ。あとは番犬としてアメリカを使っているとか、いや、何、そのお伽噺。活米って、あの番犬の犬は狂っていますよ。あの番犬は暴れている猪ですよ。番犬として、活米とか、それは出来ないですよ。サイコパスを番犬として使うことは出来ないので、ワシントンの本質を知るチャンスではないかと思っています。

何故、日本が独立しようとしなないか、私も不思議だと思っています。今月のクライテリオンの中でもあったんですが、福田恒存とか、もしかしたら日本の文化の深さ、ある意味、負の側面を持っているんじゃないかと、今、思ったんですが、福田恒存とか綺麗な事を書くんですよ。でも、いつも保守とは何かとか、文明とは何かとか、そういう考えはいいんですけども、多分、欠けているのは、日本の中で必要なのは、そういう人と武士じゃないですか。

武士は保守とは何かじゃなくて、敵の弱点とは何処かを考える人々でしょ。男です。そのような人も必要じゃないかと思っています。サムライが居ないから日本が独立できていないと。独立する為に、例えば政治家に会う度に、独立することを目指しますか、具体的にいつ独立しますかと聞きましょう。政治家は答えられないじゃないですか。いやいや、いやと言って。去年の夏に有村治子に対して、日米同盟はちょっと、と言ったら、いやいや、いやという感じで」

水島「ああ、そうですか（失笑）」

モーガン「いやあ、自民党は本当に最低だなあと思いました。有村治子さんは、ただの売国奴ですけれども」

一同「（苦笑）」

モーガン「あいつの様な人が殆どですよ。政治家と関わる度に、貴方は独立しますかと。ああ、独立すると、偉いことを言うじゃないですか。じゃあ、いつですか。今日ですか。一緒にやりましょうと、言いましょう。政治家を追い詰めることは大きいなと思います。

私は北朝鮮から学ぶことが多いと思います。モーガンは中国のスパイだと、よく言われていて、ロシアのスパイとか、多分、この間、ここか他の番組に出演させて戴いた時にコメントを見たら、モーガンは噂によればCIAとか」

水島「（苦笑）」

モーガン「いや、それを見て正直、俺は、すげえなと思いました。そうになると、私はTriple Spay じゃないですか」

一同「（苦笑）」

モーガン「じゃあ、北朝鮮から学ぼうと言ったら Quadruple Spy になるじゃないですか。私は凄い人物になる訳ですけれども、北朝鮮とかロシアとか中国もそうですけれども、とにかく嫌な圧政的政府だと認めても、アメリカが持って来る内政干渉、それを弾ける力があるじゃないですか。それは、とても重要なことだと思っています。

これからの日本、『日米安保なき安保の世界の可能性』。その鍵を握っているのが日本の男だと思っています。この日本の中ではチャンネル桜が大好きです。何故かと言うと色んな理由があるんですが、男のクラブですよ。みんな、男ですよ。この番組には時々女性の方も来られるんですけれども、男の常識が通用する場になっていると思います」

水島「なるほど」

モーガン「まあ、常識。プーチンさんが言っている事、それは男の常識じゃないかと思っていて、男が立ち上がって、この国の舵を切れば、いいことになると思います。最後に、広島、明後日の広島の集会。それは歴史的な事だと思います。私まで参加させて戴いて本当に心から感謝しております。あの広島では、もう皆さん、ご存じの通りアメリカがジェノサイドをやったんですよ。その広島の中から今、アメリカのグローバル・パートナー、しかも選挙区が広島です。広島一区ですね」

水島「はい、一区です」

モーガン「その選挙区で、あの総理大臣を倒そうとしている動き自体に大きな意義があると思ひまして、もう左の方でも右の方でもノンポリの方でも、日本人の命が関わっているから、是非、一人でも多くの方に来て戴きたいと思っております。是非、右左というような仕組みを考えないで、日本人の命が関わっているから、一緒に戦いたいと思っております。以上です」

水島「はい。丁度、北朝鮮の問題を言ってくれたんですけどね、我々の中でも別の討論とか



で色々出ているのは勿論、体制の問題だとか民主的じゃないとか色んな言い方がありますがけれども、少なくとも一番の敵は中国だ」

モーガン「そう」

水島「つまり、金正恩、金正日、こういうものを排除しようとしたのは中国で、あの短距離ミサイルとか色んなミサイルも別にアメリカを攻撃するっていうよりも、むしろ中国の北京や天津や上海に、いつでもやれるよっていう状態で、鴨緑江も人民解放軍が超えないような、そういうものが、実はあるっていうことと、これは馬淵睦夫大使さんのお話ですけども、実は、あそこは各国のC I AとかM I 6とか、こういうところの諜報機関の活動資金の調達場所になっていた」

モーガン「うん」

水島「覚醒剤や麻薬や偽札とか色んな形で、あそこは実に危険な場所として扱われて便利だったというようなことがあって、北朝鮮っていうのは、我々が刷り込まれているのは、とんでもない独裁国家でね、人民は本当に、実際、死者が増えているんですけどもね、こういう国だというようなことになっていきますけど、実は大変、西側と言われる国にとっては便利な場所だった。だから、あそこを取りたがる」

モーガン「うん、そうですよ」

水島「それから、もう一つは地下資源もあるということで、あそこが危ない、危ない、危険な所だってなると、日本は非常に怖がると。何故、北朝鮮が攻めるのか、よく解らないって、拉致被害者の問題を除けば、日本は北朝鮮と、あまり対立していないんですよ。体制の問題はね、反体制ってあったとしても、それが今、北朝鮮が日本を火の海にするとか盛んに脅かすことによって、アメリカに対する依存度が非常に増す。トラブルマンがあって貰った方がいいということで、だから、今回、非常に問題だったのは、問題だったというか、ロシアと北朝鮮がね、これは私の判断で、皆さんも賛成してくれたんだけど、実は、これによって、ちょっと戦争が回避された。今、韓国軍が上に上がっていく可能性が非常にあって、なんと北朝鮮が地雷を敷設して壁を造っているって、どっちが脅威なんだって、そういうのをやるのは、大体、防御的な所ですね。

こういうような状態、北朝鮮の実態というのを、このことを踏まえると、もう一つは、我々が、もう一回、見なきゃいけないのは、もう20年に渡って拉致被害者アワーっていうのを、我々はずっとやっていますけれども、何故、日本に、こんな在日北朝鮮の人間が多いのにね、日本語の教師や日本の習慣を学ぶなんて態々、さらってまでやる必要はないですよ。

実は、一体、誰がこれをやったんだ。日本の中で北朝鮮とトラブルを作らなきゃいけない。もしかしたら、そういう人達がやったかも分かんないってところまで、我々は拉致被害者の番組を、もう20年、2週間おきですけど、ずっとやっていますけどね。おかしい」

モーガン「なるほど」

水島「アメリカに行ったのは何故だろうっていうね」

一同「うん」

水島「本当は、さっきモーガンさんが言ったようにプーチンに頼んだ方が、よっぽど効果的

かも分からない」

モーガン「でしょ」

水島「こういうような具体的なことまで、私達は本当に真正面から見つめなきゃいけない。もう何十年も経っているのに、私も、まさか20年もこの番組、拉致問題アワーをやるとは思っていなかったけれども、本当にそういうことが今、もう一回、自分の国の様子とかね、冷静にイデオロギーとかフィルターを通さないと、判断しなきゃいけないところがあるのではないかっていうね、今、モーガンさんのお話があって思った次第ですね」

モーガン「はい」

水島「そうすると、また、水島は北朝鮮寄りだとかね、直ぐ言われるんだけど、勝手に言っておけよ、馬鹿って言ってね」

モーガン「私もそう思います」

水島「そういうことですけどね」

モーガン「勝手に言ってくれればと思います」

水島「この問題を冷静に見た時ね」

モーガン「そうです」

水島「今言った東アジアの中に戦争を起こさせない為にね」

モーガン「そうです」

水島「韓国は今、二つに分かれていますから。大統領派と野党派とね、非常に混乱している状態があるので、そこでトラブルを起こし易くなっているんですよ。だから非常に危険な状態があるのに、その辺のところを、ちゃんと見ておかないと拙いって感じがします。はい。折本さん、お願いします」

折本「はい。やっぱり、これから、どうやって自立していくのか独立していくのかっていうことを考えた時に、」

水島「うん」

折本「やはり、とにかく国民が自主独立の気概を持たなければ話にならないなあと思います」

水島「うん」

折本「やっぱり、そういう一つの目標があって、初めて、じゃあ、手段をどうしようかっていう議論が出て来る訳であって、そもそも自立をする気の無い人間に、じゃあ、どうやって自主防衛するんだって議論をしても噛み合わないわけですよ」

水島「うん。その通りだね」

折本「ですから、じゃあ、何故、我々は自立しなければいけないのか独立しなければいけないのかと言うと、結局、最初の議論じゃないですけど、じゃあ、日本とは何なのか何を守るのかって議論を避けられないと、私は思います。やっぱり日本のそういう国柄であると

か、或いは、アメリカの、そういう理念というものが違うんだと。だから、やっぱり我々は、我々として独立しなければならないんだっていう、まず、そこを国民が認識するということですね。

あとは、やはり政治家も当然、そういう考えを持たなければいけない。じゃあ、政治家は、戦後の自民党の政治家は、そういう考えが無かったのかと言ったら、必ずしも、そうじゃなかったのかなあと思っています。例えば、今の日米安全保障の運用規定である日米地位協定、最初は日米行政協定っていう名前でしたけども、それが1952年に日米安保と同時に成立した時に、国会の中で、まあ、その前に、ある政治家がこういうことを言います。

今後の協定によりますと、これは行政協定の事ですけども『軍人、軍属、その家族の使用中の問題についても日本は裁判管轄権を及ぼし得ないということになっておるので、これは、安政和親条約以下であります』と。我々がこの様な不平等条約を黙認して承認するとすれば、我々は再び明治年代の条約改正運動の方に進まなければならないのであります』

水島「うん」

折本「『このような重大な問題を今迄、予算委員会に於いて討議してきたにも拘らず、岡崎、及び吉田、両国務大臣』これは勿論、吉田首相と岡崎外務大臣のことです」

水島「うん」

折本「『両国務大臣は口を噤んで語らない。これが独善秘密外交、吉田内閣の特色であります』と。こうやって厳しく吉田内閣を批判している政治家が居たんですね。誰かと言うと中曽根康弘ですね」

水島「(笑)」

折本「でも中曽根さんは野党時代、こういうことを言っていた訳です。しかし、じゃあ、中曽根さんが首相になったら何をやったかと言うとロン・ヤス関係とか言いながら、ひたすらアメリカに従属をするということをやっちゃって…」

水島「不沈空母でね(笑)」

折本「そうですね。思いはあるんだけども、最初のエルドリッチ先生の話じゃないですけども、結局、本音と建て前のところで、どんどん乖離してしまうところですね。やはり、戦後の日米関係、日米安保っていうのは確かに非対称的な関係ではあったけれども、しかし、決して片務的な関係ではなかったと、私は思うんです。というのは、日本が基地を提供する代わりにアメリカが日本を守るというのは、確かに非対称ではあるけれども、しかし日本も基地を提供している訳ですから、そういう義務を果たしている訳でありまして、そういう意味では片務的ではなかったと思います。

ただ、それを、例えば憲法改正によって対称化しようという議論が、やはり、戦後、自民党がやってきたことですね。ただ、もし、それを、例えば憲法を改正して対称化するのであるならば当然、日本は九条改正によって集団的自衛権を行使できるようにすると、所謂、相互防衛条約のようなものに変えていくということになると、アメリカがやられた時には、日本も守らなきゃいけない。

また、その逆も、そうだとということになると、今迄は日本がアメリカを守れなかったから、

基地を提供しているという話だった訳です。しかし集団的自衛権を行使できるようになったら、日本もアメリカを守るんだから、日本にだけ在日米軍基地があるのはおかしいっていう話になる訳であって、当然、在日米軍基地を撤退させるか、或いは日本もアメリカに基地を置くかですね」

水島「うん」

折本「日本軍もワシントンに基地を置くか、そのどちらかでなければならないはずですよ」

水島「そうだね」

折本「しかしながら、結局、いつの間にか、岸信介さんが安保改定で、あれだけ頑張ってやられたというのは、日本も憲法改正によって軍を持って集団的自衛権を行使できるようにすることによって、相互防衛条約にすることによって在日米軍基地を撤退させるというのは悲願だったと思います。だから、よく岸さんはアメリカのスパイだとかいう風に言われますけども、私は、そんな簡単な人間ではないという風に思っています、正に、その狐とタヌキの化かし合いじゃないですけども、お互いに、そういう熾烈な駆け引きがあったという風に思うんです。

しかしながら、それが、いつの間にか憲法改正の議論と安保の改定の議論ってというのが別々のものになってしまっていて、憲法改正によって集団的自衛権を行使すること自体が、目的化していったという、まあ、そういう話だと。だから、結局、対米従属自体が目的化していったということだと思います。で、基本的に我々は、じゃあ何故、自立できなかったのかと。自民党のアプローチというのは基本的には、先程申し上げたように、やはり憲法改正によって集団的自衛権を行使できるようにして相互防衛条約にしたら、全部、出ていって貰えるという話だったと思うんですね。しかし実際には、例えば、2017年に、安倍さんが安保法制をやって、部分的ですけども、集団的自衛権の行使を出来るようにしたということですよ。

しかしながら、結局、この図を見ても、まあ、皆さんには釈迦に説法の話ですけども、今迄、思いやり予算と称して、90年代からずっと、基本的には基地を提供する費用以外は、アメリカ軍が負担をするという風に日米地位協定の24条に日本が負担すべきものを除く他、この協定の存続期間中に日本に負担をかけないで合衆国が負担するという風に書かれている。しかし1978年に金丸信、当時の防衛長官が思いやりの精神を持って、その時は、アメリカもニクソンショックのあとで景気が悪かったですので、費用を負担すべきだということで『思いやり予算』を始めて、最初は、年間六十数億円で始まったのが、今は1年間で2千億円近くのお金を使っている訳です。

それは基本的にはアメリカに守って貰っているから、だから基地を提供するし、それに付随する費用、米軍の労務費ですね。在日米軍基地で働いている従業員の労務費だとか、あとは娯楽施設で働いている従業員の労務費だとか水道光熱費だとか全部、日本が持っている訳です。

地位協定で規定されていないところに特別協定っていうのを作って、その費用を『思いやり予算』として、毎年2千億円ずつ出している。だから本来的には、集団的自衛権を行使できるようになるのであるならば、当然、日本がアメリカの駐留に対して費やす費用っていうのは減っていかなくちゃいけないはずだと思うんですよ。しかしながら、2017年に安保法制が通って、集団的自衛権を行使できるようになったのに、逆に『思いやり予算』っていうのは

増え続けていってしまっている訳です。

ですから、そういう意味では、憲法改正すれば、結局、アメリカは出て行ってくれるというのは、やっぱり幻想に過ぎなかったのかなということだと思います。それが戦後、ひとつの自民党のアプローチの大きな失敗だったのではないかなという風に思います。

ですから、やはり、その部分では、もうアプローチを転換していかなければいけないという風に思いますし、まず重要なのは、そういう妥協的な微温的なやり方ではなくて、やはり、我々が、しっかりと、そういう自立の意志を示すということが大事だと思います」

水島「はい」

折本「やっぱりアメリカと言えども、民主主義の国ですから、アメリカの世論に対しても、やはり我々は独立を求めているんだということを明らかにしていかなきゃいけないと思いますし、そして、世論工作を果たしていかなければいけないなと言う風に思います」

水島「うん」

折本「兎にも角にも自立しなきゃいけないんですけども、重要なのは、やっぱり、自立したあとで、我が国がどういう国の国家運営を目指していくのかっていうグランド・デザインって言うんですかね、そういう画を描いていかなければいけないなと。やはり、唯我独尊では、駄目な訳でありまして、日本は、いかなるそういう世界秩序を目指していくのかっていう大きな画を描いていかなければいけない。

先程、そういう世界秩序が多極化していく中であって、その文明の、文明のって言いますか、調停者にならなければいけないというような話を矢野先生がおっしゃいましたが、正に、この日本が、どういう多極的な社会秩序の中での役割を果たしていくのかということを描いていかなければいけない。

戦前と言うならば、例えば大東亜会議のようなものが開かれて、単に日本が自存自衛の為に戦うのではなくて、やはりアジア民族の独立と解放の為に戦うんだという一つの大きな理想があったと思います」

水島「うん」

折本「やはり、そういう理想を国家として描いていかなければならないという風に思います。サミュエル・ハンチントンじゃないですけども、今回のウクライナ戦争にしてもイスラエルにしても根底にあるのは、やっぱり文明の衝突っていうのがあると思うんですね。実際に、ハンチントンの本の中でも今のウクライナ戦争っていうのは予言されておりまして、基本的にはスラブ文明圏と西洋文明圏の戦いの一つの断層線、fault line がウクライナに敷かれているんだと。

次は、ここが紛争の火種と言いますか、火薬庫になるぞということを正確に予言されています。だから、そういった中で日本こそが正にそういう道義外交を掲げて、世界の中の文明の調停者になっていくという、まあ、それぐらい偉大な国を目指していかなきゃ、道義国家を目指していかなければいけないのではないかなと。

私は早稲田の卒業生で、水島社長もそうですけども、校歌の中に『東西古今の文化のうしほ一つに渦巻く大島国の大なる使命を担ひて立てる』という歌詞がありますけど、正に、東西

古今の間の狭間にある、この大東国としての理想を目指していくと。それくらい、やはり、大きな議論をしていかなければいけないなあという風に思っております」

水島「そうですね」

折本「失礼しました。はい」

水島「はい。有難うございます。ちょっと付け加えると、いや、付け加えるっていうものは無いんですけど、ちょっと別のことを言うと、さっき核武装の話が出たので言っておきますと、あの櫻井よしこさんという従米保守の方ですけど、産経新聞も一体化しているんですね。核武装の話については1月1日の元旦のものと、この間の建国記念日だったかな2か月前ぐらいに出たコラムの中で『核抑止力は必要だ』って言っているんですね。その代わりにアメリカは守ってくれるかどうかは一切、言ってない。私達は核武装の可能性を考えなくちゃいけないかも分からないと。あの従米保守の櫻井よしこさんが言い出している。

それから産経新聞も今年1月1日は、とんでもないという話だったけども、そういう可能性という言葉で、あの産経新聞ですら言い出している。でもアメリカの核抑止力は全然、頼りにならないっていうことは一切、言ってない。つまり具体的に核抑止力は必要だって言いながら、アメリカが守らなかつたらということには言わない。

櫻井さんは苦し紛れにと言うか、失礼ながら、もう核武装の可能性も考えなきやいけない時が来ているというね、もう、ちゃんと言ったらどうだっていうことだけでも、こういう状態まで、今、来ているというか、はっきり言うと、産経さんは段々追い詰められて来ているという状態があると思いますね。

そのところは凄く大事なことでね、それから、もう一つ言うとグランド・デザインのことで言うと、それは、やっぱり必要だと思いますね。大東亜会議と、さっき言った脱亜入欧っていう、もっと言うと明治維新から西洋近代を取り入れるっていうこと、あれが実際、まあ、止まっているっていう状態がね、実はもう限界に来ているっていうこと自体、やっぱり、我々は、もう一回、見つめ直さなきやいけない。

だから欧州もアメリカも参考にはならない。我々の道をちゃんと考えなきやいけない時代が来ているっていうことでね、その軍事的、政治的、経済的な独立だけじゃなくて、精神的な独立としても、アジアのひとつの日本民族としての在り方を問わなきやいけないということが出ていると思います」

藤井「すみません」

水島「はい、どうぞ」

藤井「僕、5時までに出ないといけないので、すみません、先に少しかだけ発言させて戴きます。今日は『日米安保なき世界の可能性』を考えている訳ですけど、キーワードは、最後に折本さんがおっしゃった、今、水島さんがおっしゃったように、核武装、これは、『日米安保なき世界の可能性』っていうのも核武装論から逃げられないっていうか、もう、それイコールの議論であるということと、もし、そうなったとしたら、日本っていうのは、どういう物語で、この世界の中で安全保障を確保し、そして世界にどう貢献していくのか」

水島「うん」

藤井「安全保障と世界の貢献っていうのは表裏一体ですから、それが無い限り安全保障って無いですから、それを考えないといけない。この二つがポイントだと思うんですけど、まあ、前者の核武装については、今、櫻井よしこさんとか産経だとかっていうお話がありましたけど、私が、いつも大阪で出ている番組の『正義の味方』という朝日放送の番組で、僕と、高橋洋一さんが出ている、ほぼ、同じことを言っていたんですけど、核の傘は広がらない可能性、テレビ上のオンエアの生放送ですけど、僕は核の傘が開く保証は全く無いと。

アメリカの国益に副って開けることが国益だと思えば開くだろうけど、そうなる保証はないから全然、開かないかもしれない。そうだとすると、この核を防ぐには、僕が言ったのは、もう道は一つしかない」

水島「うん」

藤井「そういう言い方をしたら、高橋洋一さんが、まあまあ、ぬるい言い方ですけども、核共有と核保有っていう段階があって、まずは核保有に向けて核共有の段階にしておかないと、議論を上げていかないと難しいですね、ということで、大阪での番組の中ではありますけど、地上波で、大阪でいくつかの全国ネットではありますけれども、核武装論というものが地上波に乗って流れましたが、特に批判も無く終わったっていうのは僕自身、時代も大分、変わったなと発言しながら思いました」

水島「ああ、そうですね」

藤井「こういう議論を地道にやっていくことが必要だし、それは、やっぱりチャンネル桜がインターネットという場が中心ですけども、こういう所で、しっかりと議論してきたことが少しずつ広がっているんだなと思います。これは絶対に続けていかなくてははいけない」

水島「はい」

藤井「それと、この日米安保なき時に、やっぱり外交戦略、別に言うと、日本は、どういう物語を作っていくのかっていう時、僕は『表現者クライテリオン』の中で、今、アジアの新時代っていうアジア主義、保守からのアジア主義という恰好で、アジアというものに見据えた外交戦略と言いましょか、アジアとの関係を見据えるシリーズを、僕はこの1年ぐらい、ずっとやっています。

それは明確に『日米安保なき世界の可能性』を探る為に、我々が意図的に始めたんですけど、当然ながら戦前は、我々は大東亜共栄圏だとかアジア主義だとかっていうものがあって、それから五族共和とかあって、あの時は天皇陛下を中心として、大東亜共栄圏を考えるという物語を構成していた訳ですけど、この令和の時代に天皇陛下を中心に作るかどうかという議論は他の国のナショナリズムがありますので、違いはあるとは言え、そこは、ちょっと、置いておくとしても、ほぼほぼあの時に構想していた大東亜共栄圏っていうものは『共栄圏』ですから非常に重要な話であって、それはアメリカと戦う為だとかヨーロッパと戦う為とか、中国と戦う為という文脈とは別に、アジアの中で、どういう外交を解いていくのかという問題が重要だと僕は思います」

水島「そうだね」

藤井「これは今迄、日米とか日露とかやって来ていましたけど、自民党の2010年の綱領にも書かれている様に、日米安保条約を基軸に全部、考えまんねんという、何か、もう超単純極まりない、方程式で言うとXが一個だけで二乗も出て来ない小学生が解くような一番簡

単な方程式みたいな話ですけど、我々は、これから『日米安保なき世界の可能性』を本当に探るのならば、多次元方程式を解いていかないといけない訳で、そうなると地政学的、そして文化的に韓国との関係、中国との関係、東南アジアとの関係、そしてアジアと言うかどうかは別ですけども、勿論、アジアの地域に含まれますがロシアとの関係、これを日米同盟とは別に、僕は日米同盟を破棄しろと言っている訳ではないし、アメリカを敵で戦えと言っている訳ではないけれども、日米安保が無い世界だったら、その日本の周辺の国々と多次元方程式を解かないといけない。

その多次元方程式を解く時に、大東亜戦争、或いは、その戦前の時に日本国民が考えていたアジアというパースペクティブというのは絶対に必要だと思います。その文脈の下、尖閣の問題があるし、韓国の日韓問題なんかもありますけども、その問題は問題として、ちゃんと解くということを考えながら大アジア主義と言いましょか、その保守からのアジア主義というものの可能性を探りたいと僕は思っています」

水島「そうですね」

藤井「これは非常に難しい歴史的な課題を孕みますけど、これ無くして『日米安保なき世界の可能性』というのは探れないと、僕は思っていますので、アジアに目を向けた保守の議論というものが是非、必要だと思います。これを最後に申し上げて、今日は5時までということで失礼致しますけれども、どうも有難うございました」

水島「はい。有難うございました。ということでご退場されます。有難うございました」

藤井「はい、有難うございます」

水島「それではエルドリッチさん、お待たせしました」

エルドリッチ「はい。有難うございます。藤井先生の発言の前に折本先生のお話がありましたが、それと直接、関連するんですけども、議論を非常に重視されていると言うことで、意見が全く同じ訳では無いですけども、結論的とか、或いは内容的には、非常に近いなあと思っています。特に最後の方でおっしゃっていた、グランド・デザインが必要ということですよ。

これが冒頭で述べていた、4つのシナリオが考えられる日米同盟の解消です。それに加えて、例えば保守の方々が新しい日本の在り方を提示するという、新たな構想が考えられると思います。その中で何を見本にして参考にするのか。例えば今のお話があったように日本の歴史の中からされるのか、或いは、核武装化した上で他の既に核を持っている国々の事例を参考にするのか分からないですけども、やっぱり、なるべく前もってグランド・デザイン構想が必要だなあと感じています。

そこで私は日米同盟の解消になる4つのシナリオがあるのではないかと思います。さっきも触れていたんですけども尖閣問題、その第5条が機能しない」

水島「はい」

エルドリッチ「もう一つが、台湾で有事があった場合、結局、アメリカが対応しない。或いは、十分な対応が出来ないということで、やっぱり世界のアメリカに対する見方が大きく変わると思っています。当然、日本の中でも考え方、見方が変わると思っています。これが一番、初めの議論とも関係するんですけども、アメリカが頼れない国になっている。最後に



アメリカが戦争に勝ったのは、いつだったかなあと言えるほど、殆ど全部、中途半端な形で終わっている。

その代わり、多大な迷惑と被害を与えてしまっている。だからアメリカに核があると、その状況が悪化するだけではなく永遠的に悪化しているという状態ですけども、じゃあ、台湾で、アメリカの介入が成功した場合、日本の中で大きな議論が起こると思う。そこで日本は中国と新たな関係を構築しないとイケない。そこでアメリカが日本から出る、アジアから出るということが考えられる。

3つ目が、昔からあるアメリカ国内の結論として、例えば80年代、そして北朝鮮の最初の核の疑惑の時、今から30年前、1993年、94年の時に米国の議会が、もし有事があった場合、日本が協力しなければ、もう日米同盟を解消するというのを向こうが言っていた30年前。だから、そういうことが考えられる。それとも関係するんですけども、トランプ大統領候補が過去には日本が払わなければ米軍が居なくなる、そういうような発言もあつたりしていたんですけども、私は、それが本音じゃないと思っています。

トランプとか、特に共和党にとって、やっぱり日本との関係が非常に重要と思っていると、私は感じている。だからアメリカの国益上、日本と関係を維持すべきという風に多分、結論している。日本の中では、もしトランプが大統領に再びなったら日米同盟が大変とか…、私はそう思っていないんですけども。

あと4つ目、日米同盟の解消になり得るのは、折本議員がおっしゃっていたんですけども、この日米同盟に於ける日本の役割、国際社会に於ける役割が増えれば増える程、在日米軍の撤退ないし、少なくなるという、その力学が50年代から実際にはあったんですけども、日本が冷戦後に急速な撤退ないし削減をやめて欲しいということで、1996年に日米同盟の再定義があったと思うんですけども、大体、日本の野党から米軍の撤退を今迄、要求してきた」

水島「うん」

エルドリッチ「例えば、細川元総理、そして鳩山も似ている発言をしていた。これが駐留なき日米同盟という構想です。実は、私は昔からそういう研究をやっていますんですけども、冒頭で申し上げていた芦田均の構想、その日米同盟の構想が実は有事駐留の構想だった。吉田茂になると、基地を提供することによって米軍が常駐するようになったんですけども、元々日米同盟の構想が有事駐留だった。安保改定の時、さっき折本議員との話とも関係するんですけども、安保改定の時に、役割分担の話で、もっと負担すべきという議論があったんです。その片務性を無くすべきだと。で、結局、アメリカの議会が望んでいた、或いはアメリカ政府が望んでいた片務性は、どちらかと言えば無くならなかった」

水島「うん」

エルドリッチ「それで、どうやってその相互の日米同盟にしたかと言うと、1957年から1958年にかけて、当時の駐日大使のマッカーサー、あの元帥の甥っ子がアイゼンハワー大統領に対して一生懸命、説得していた。あと議会の方にも説得した。マッカーサー大使は議会に物凄く影響力があった。

まず、一つが、その伯父の関係だった。もう一つの関係があったのは、彼の義理のお父さんが元副大統領だった。元上院議員だった」

水島「うん」

エルドリッチ「だから民主党系の議員と共和党の議員が物凄く彼の意見を聞いていたけれども、結局、解決したのは、在日米軍は基地があれば、日本がその基地を守ることによって、相互性を保つことが出来る。そうすると、もし基地が無くなったら、守ることがもう無くなるので、日米同盟の解消になり兼ねないという議論が出来ると思う。ですけれども、先生がおっしゃっている憲法改正によってアメリカまで守ること、場合によっては駐留する事だったら、もう完全な対等性が出来ることになりますので、丸々議論する余地があるんだなあという風に思っています」

水島「なるほど」

エルドリッチ「ちょっと長い説明だったんですけど、以上です」

水島「はい。有難うございます。残念ながら時間が来ました。本当に対中国、対ロシアとか、本当は色々な面がありますから話し合わなきゃいけないんですけど、今日は、もう時間になりましたので、最後にお一人ずつ1分ぐらいで、ご自分の感想、何かコメントを載せて終わりたいと思います。じゃあ、矢野さんから一言、お願いします」

矢野「今日のテーマ『日米安保なき世界の可能性』ですが、私は『日米安保なき世界の必然性』ということを前提に、日本は自立化をしなくちゃならないと」

水島「なるほど」

矢野「もし、そうしなければ、日本は周辺の大国の草刈り場になってしまう」

水島「うん」

矢野「日本には自立する能力、可能性が充分ある」

水島「はい」

矢野「だから、そこで自信をもって世界に貢献できる日本と、伝統的な古事記以来の神々と、それから天皇と民と、そして日本という国土、この縦の軸をしっかりと押さえていくということが、まず出発点だと、私は思っております。以上です」

水島「はい。有難うございます。では、山中さん、どうぞ」

山中「はい。今、矢野先生が言われましたけどね、本当に、もう可能性じゃなくて必然性。『日米安保なき日本』そして、その必然性」

水島「うん」

山中「今、ウクライナを見れば、もう本当に、よく分ることだと思うんです。毎日、可哀想、可哀想、朝から晩まで専門家が出て来てやっている。だけど、貴方が何なのか。何が理由なのか。もうアメリカ・ロシアの代理戦争ですけど、やはり、あそこにいる指導者ですね」

水島「うん」

山中「その彼がああ戦争に引きずり込まれてしまったっていうことになっているけど、それを、我々は他人事だとして、ずっと見て来ていますけど、もし、これを続けていたら、日本は、このまま亡国の道を辿るしかないですね」

水島「うんうん」

山中「ですから、それを、どのように回避するかって言った時に、やはり自分達が独立することに対して、どのぐらい一般国民の人々が、そういった心構えを持って、そういった人々を選んでいくかっていうことをやらない限り、本当にこのまま行って沈んでいくだけかなという風に考えています」

水島「はい。有難うございます。では、折本さん、お願いします」

折本「はい。やはり、この日米安保、日米同盟というものが一つの覇道の同盟になっていると思います」

水島「うん」

折本「まあ、チャイナも今、この霸道主義を突き進んで行っているということでありまして、昔、孫文が大正13年、1925年に、亡くなる直前ですけども神戸に来ているんですね。大アジア主義演説というのをやりました」

水島「うん」

折本「日本は日露戦争に勝った時には、アジアの英雄だったと」

水島「うん」

折本「アジアの理想だったと。しかし、それが結局、覇道に陥ってしまって、西洋の覇道に追従するようなことになってしまった。今こそ日本は、西洋覇道の番犬ではなくて、東洋王道の干城たれという演説をやった訳ですね」

水島「うん」

折本「私は、日米同盟、日米安保が無いから、じゃあチャイナに付けばいいのかという議論ではなくて、あらゆる霸道主義、覇道に対して対抗していく。共存共栄の王道秩序を、日本が正に主宰して目指していくと、その上でアメリカでも、その霸道主義に反対している国民は、アメリカ国内にも沢山、居る訳ですから、そして、今、世界的に伝統回帰の流れにありますので、やはり、そういったナショナリズムの勢力と世界的に連帯して、我が国の自主独立を模索していく必要があるという風に考えております。以上です」

水島「はい。有難うございます。モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。今日は本当に勉強になりました。有難うございます。折本先生がおっしゃったんですけども、エルドリッチ先生のお話にもあったんですが、Grand Design、グランド・デザイン、それは正に国体じゃないかと思っていて、私の考えでは、グランド・デザインっていうのは、設計の意味のデザインであれば、ちょっと違うなと思っていて、日本の国体は神々がお示しになったもので、人間が地球を設計した、少しずつ、それに気づいてきた。でも決して人間が設計してデザインしたことではないので、日米安保なき世界が、それは、ただの出発ラインに過ぎないので、そのあと、どういう日本が待っているかって言うと、それは国体の問題そのものだと思っています。

デザインってアメリカ人が考えている国をデザインするとか、そういう Constitution じゃなくて、国体の意味を持つ Constitution を考えるべきじゃないかと思っています。以上で

す」

水島「はい。有難うございます。エルドリッチさん、お願いします」

エルドリッチ「はい。ちょっと内政干渉の発言をさせて戴きますけれども…」

水島「はい（笑）」

一同「（笑）」

エルドリッチ「これからのグランド・デザインに向けた新しい内閣を考えさせて戴きました。そこで山中泉さんが新しい総理大臣で、水島社長が官房長官でお願いします。矢野閣下が、防衛大臣です。折本議員は外務大臣で、モーガンさんは駐日米国大使でお願いします」

一同「（笑）」

エルドリッチ「いかがでしょうか」

山中「いやいや、いや（笑）」

水島「はい。有難うございます。そういう色々なデザインがありますけどね、はい。そういう意味で、私がいつも考えているのは、日本という国が、別に優れているという言い方じゃないんだけど、一つ特徴的なのは近代が作られた国民国家。社会契約論とか、こういう様々な国家ではなくて、私達の国は、神武天皇以来の自然国家、天皇がお創りになった国だという流れを受けているのと、もう一つ、一番大きいのは、歴史や伝統や文化っていう言い方じゃなくて、実は、我々の国家の中の一番の特徴は時間性だと思っているんですね。空間の充実性や拡大っていうのは普通、政治が考える訳ですよ。

みんなが豊かになるとか色々な事を考えますけど、空間の拡大っていうのは、宇宙に行って、ここを開発しようとか色々あるけども、それと充実、自分達の生活空間や、そういうものを幸せに、豊かにするっていうのがありますけれども、我々は、それと同時に、もう一つは、先祖や自然やそういうものが全く一体化した形の国家である。森の国である、宮の森、鎮守の森、森で本当に出来ている国だっていう時間性を持った国で、だから、西洋の人達に中々理解できなかった特攻隊の死生というものが、やっぱり、あるんだっていうことを、私は、いつも言っているんですけど、こういう国家論というものを、もう一回、色々な意味で検討しなきゃいけない。

近代国家論の問題と何処が違うかっていうものを、やはり我々は見ていかなきゃいけないっていう気がしております。それとね、やっぱり、今言った核武装の問題、原爆の問題、私は、また広島へ行きます。モーガンさんも一緒に行きますけどね」

モーガン「（頷く）」

水島「このジェノサイドの問題っていうのは、例えば、こういう風に考えて下さい。まあ、直ぐ小林秀雄を引用してよくないんだけど、私は、この小林秀雄っていう人には本当に傾倒していますんで言うと、忠臣蔵ってある訳ですね。忠臣蔵の中に菊池寛の話が出て来て、それは自分の女房と子供を虐殺される。それで、その殺した犯人が死刑の判決を受ける訳です。そうすると、その死刑囚は、教戒師っていうか、そういう宗教的な人間に出会って、凄く反省しちゃう訳です。申し訳ないと。とんでもないことをした私は死刑になって当然の人間だと、物凄く善い人間になっちゃう訳ですよ。法律では、死刑になる訳で、その犯人は有難う

って言いながら肅々死んでいく訳ですね。

残された家族の親父は納得できないですよ。釈然としない。この問題ですね。私は、本当の文化とか、そういうもの、例えば大和魂とかゲルマン魂とかね、スラブ魂とか色んなものがあるけれども、そこから法律や設計から、はみ出る心っていうのが、実は、それぞれの文化、民族の文化とか色んなものを創り出していると思うんですね。だから忠臣蔵も葉隠れなんかだと言うと、あんな、計画を立てて、1年も2年もかけて誤魔化して何かやって計画立ててから復讐を遂げる、あんなものは武士道じゃないって、山本常朝は言っている訳ですね。

翌日、刀1本持って吉良邸に斬り込んで斬り死にするのが武士なんだと。こういう問題っていうのは、いつも私達のはみ出る問題っていうのがあると思うんですね。原爆の問題も落とされた。だから、まあ、ごめんねって、向こうはごめんねも言っていないですよ（失笑）。お前らが悪いんだと、あれは平和を齎す為にアメリカ人とか日本人を殺さない為に落とされたって平気で言っている訳です、今でも。例えば、アメリカ大統領が、あれは良くなかったと言っているけども謝罪じゃないですね。謝罪されたとしても、我々は納得できないというような部分を、本当は、私達日本人は大事にしてきたんですよ。

これを歌にしたり小説にしたり色んなものやってきた。日本の文化っていうのは、そういう繊細さがある。よく日本の兵隊は泣くって言うけども、この涙こそ日本の世界一強い兵隊だった。平家物語も何でも全部、そうですね。我々のそういう感情というものを、もう一回、日本の文化の素晴らしさとか、日本人の良さというもの、優しさと強さは全然、矛盾しない日本人が、少なくともかつては居たという。特攻隊を含めて。こういうところも、やっぱり、私達は、もう一回、自分の在り方とか日本人の在り方を見直さなきゃいけない。それが結果としての安保なき世界というものの道を切り開くんじゃないかと思っています。はい、ということで、今日は、皆さん、どうも有難うございました。失礼します」

一同「(礼)」

\*\*\*\*\* 以 上 \*\*\*\*\*